

會



報

1960年10月

211

日本山岳会

山に志す

若い人へ

日高信六郎

登山は水泳とともに誰れでも出来る最もやさしいスポーツである一方、その実施課程において一步を誤ると生命を失う危険のあるおそろしいスポーツである。

またほかの競技は「人」を相手とするものであるから、自分の未熟さや失策が相手のエラーによつて帳消しになるばかりでなく、試合に勝つことさえあるのだが、登山の相手は「自然」であり、自然は決してエラーを出さないから、僅かな失策や油断でも必ず自分

にハネ返つて、しばしば重大な事故のものになるのである。それに加えて日本の山は、アルプスやヒマラヤなどくらべると、高峻険悪の程度がズツと低いから、ややもすると馬鹿にしてかかる人があるが、わが国の天候はきわめて不安定できびしいから、悪天候にブツつかると大変な目にあつて生命をおとす例が少くない。

だから山に登るものは常に謙虚な心持と真剣な態度をもつて、山岳とこれに関連する地形地質、天

候積雪その他あらゆる事項について研究を重ね、つねに自分の力を量りながらこれに相応した山に登つて、登山技術をみがき、経験を積み、山の見かたや登山の心構えについて不断の考究をつづけることが肝要である。

登山は冷厳な自然を相手とする真剣な対決であることを忘れてはならぬ。肩すかしや足取りのようなゴマカシの利かない四つ角力である。一步一步をつみ上げて高いところに到達するのが登山の要諦である。

山はあらゆる階層の人に向つて開かれていて、老若男女、強いものも弱いものも、めいめいの力相当に、めいめいの心持ち相應に、山に登り山を楽しむことが出来る。山はわれわれにとつて、一生かかつてもきわめ尽せぬ楽しみと修練の場である。

われわれは「山」を相手にしていることを忘れてはならぬ。いくらむつかしい絶崖をこなし氷壁を「征服」しても、それが「山」の一部であり、その部分を通して「山」に登り、「山」を味つていてことを忘れては、都会のまん中で高いビルの壁をよじ登るのと変りはないだろう。ところが「やさしい山」「低い山」に登つても「山」に対する心持ちと登山に当

つての態度と技術が真面目であれば、立派な山登りをしたと言えるのである。

こんど日本山岳会が全国高体連といつしよになつて、高校生登山技術講習会を開らいたのはこの趣旨によるものであつて、基礎技術と心構えとをミッチリ研修し、先生がたとは、高校生登山に必要な諸問題を徹底的に討究しようとするのである。そして「正しい登山」を習得することによつて、近ごろあちこちに起つて世を驚かし人々を悲しませる山での遭難事故の絶無を期したいのである。

受講者諸君は十分この機会を活用し、遠慮なく講師に質問したり、お互いに意見を交換したりして、講習会の成果を挙げることに協力していただきたい。

この企てが駒ヶ根市当局の御好意によつて実現できるようになつたことについて深く感謝するとともに、御後援下さつた長野県教育委員会、毎日新聞社、準備と実施に当つて種々御世話いただいた日本山岳会信濃支部のかたがた、振つて講師団に参加された会員諸氏に心から御礼申し上げます。

(昭和三十五年八月二日、高校生登山技術講習会開会式あいさつ)

本号主要目次

- ・山に志す若い人へ……………一
- ・高校生登山技術講習会……………二
- ・講評と感想……………三
- ・富士山頂研究所について……………四
- ・日本山岳協会その後……………五
- ・富山支部役員総会に出席して……………六
- ・木暮さんの著書……………七
- ・雪の北アルプス横断記……………八
- ・雨飾山の西南面……………九
- ・札幌だより……………一〇
- ・会員通信……………一〇
- ・再び小川山へ……………一〇
- ・利尻岳……………一〇
- ・会津駒・袖沢の測登……………一〇
- ・飯豊登山のこと……………一〇
- ・還暦偶感……………一〇
- ・図書紹介……………一一
- ・会務報告……………一二
- ・小集会記事……………一三
- ・アラスカ、マッキンレー……………一四
- ・婦人部便り……………一五
- ・ヒマラヤ旅信……………一六
- ・山の事故統計表について……………一七
- ・36年度体協外貨予算枠……………一八
- ・割当申請について……………一九

高校生登山技術講習会

日本山岳会

近年わが国の海外遠征登山はきわめて盛んになり、ヒマラヤに、アンデスに、アラスカに相次ぐ遠征隊を送り出し、いずれも相当の成果を収め、わが国の登山技術は世界的に高く評価されるに到った。

一方これら海外遠征の基盤となる国内の登山界も、毎年上昇の一途をたどり、特に最近では「ブリーム」と呼ばれるにふさわしい異常な活況を呈している。

この現状から、本会では全国的な登山技術の向上と、登山界の正常な発展を図るため、特に次代を担う高校生および、その指導に当られてゐる先生方のために、全国高体連・ならびに長野県駒ヶ根市と共催で、中央アルプス駒ヶ根に於て、高校生登山技術講習会を開催した。

本講習会は、上記の趣旨により、もつとも初歩的な登山(夏山)の基礎技術の実技訓練を行い、高校生の登山に密接な諸問題を捉え、講義・討論を通じて広く基礎技術全般に亘つて研修することを目的とした。

受講者は、各都道府県から高等学校山岳部担当教員一名、生徒二名とし、各都道府県高等学校体育連盟登山部に選出を一任した。

△参加都道府県▽青森、岩手、宮城、福島、長野、新潟、石川、

山梨、静岡、茨城、千葉、三重、岐阜、京都、大阪、福井、兵庫、滋賀、和歌山、岡山、鳥取、島根、愛媛、香川、徳島、高知、福岡、宮崎、熊本、生徒六十一名、教員二十八名、受講者合計八十九名。

△講師団▽総リーダー 浜野正男 生徒パーティ、チーフ・リーダー 村木潤次郎、サブ・リーダー 日下田実、折井健一、清水悟朗、藤田博、梶本徳次郎、青木安照、川上隆、山野井武夫、竹田寛次、住吉仙也、田村扇一、鈴木羊三、雪下国男、片桐理一郎、山本健一、篠原敏弘、阿部盛明、高橋進、篠原敏弘、阿部吉生、石島襄二、藤田佳宏、相沢裕文、熊谷義信、徳久球雄

△行動概要

八月二日(曇) 駒ヶ根市民公民館にて開会式(P.M.二、三)ーバスで高原荘着(四、三〇) 夕食後準備会、装備点検。

八月三日(晴) 高原荘着(A.M.七、〇〇)ーバスで伊勢瀧。グールーと千畳敷ホテル着(一、〇〇) 夕食後、高校生の登山、登山の基礎技術、遭難対策について、講義(担当、浜野、村木、梶本) 八月四日(晴、夕立) 教員、生徒各別行動をとる。

△教員パーティII ホテル発(七、五五)ー宝剣山頂下にて、岩登りの基礎、綱のとり扱いについて(七〇分、担当梶本)、中岳にて、地図の見方と実測(三〇分、担当藤田)、駒ヶ岳ー濃ヶ池、上部雪田にて、簡単な雪渓技術(三〇分、前岳ー宝剣の谷よりカールに下り、高山植物一般について(担当、高橋)ーホテル帰着(三、五五) 夕食後、高校登山の諸問題について討論(七、三〇ー一、三〇)

△生徒パーティII ホテル発(六、三〇)ー檜尾岳(八、三〇ー九、三〇)ーホテル着(十二、三〇)ー駒ヶ池幕営地(二、三〇) 八月五日(晴後曇) △教員パーティII ホテル発(九、〇〇)ー三ノ沢岳(二〇、四〇)ー一、二〇ーホテル着(二、〇〇) ホテルにて地図、地形の講義(担当、藤田)、夕食後、高校山岳部の諸問題について討論(六、三〇ー一、一五)

△生徒パーティII 幕営地(六、四五)ー宝剣岳(七、二〇)ー三ノ沢岳(九、〇〇)ー宝剣岳を経てー幕営地帰着(一二、四五)、午後反省会、司会、日下田実 八月六日(晴) 教員パーティ、ホテル発(八、〇〇)ー伊勢瀧コースより下山、伊勢瀧着(一一、三〇)ーバスにて高原荘着(一二、二〇) 閉会式、日高会長、北原駒ヶ根市長、高山信濃支部長、高体連登山部長代理挨拶、続いて浜野総リーダー、村木チーフ・リーダー、梶本リーダーより講評、終了後、高原荘にて解散(四、三〇)

新潟県直江津高等学校

二年 吉田秀夫

岡山県立津山高等学校

室井克之

行動中、講師さんの注意、説明は、講習生の我々にもよく納得がゆき、団体生活の行動についても、十分とまではいかなかった。実際の体験を通して理解できたように思いました。ザイルの品質について理論的な説明がなされたのは、非常に参考になりました。

第三日、駒ヶ池での幕営地選定のとき、テントの張り方、それから食事の準備にいたるまで講師さんから教えていただき、身に入つたので今後の役に立てたいと思つています。

反省会において片桐先生がテント内の整理、食事の用意の動作が、自分的に言われましたが、自分も確かにそう思います。これは日頃、僕はテント外で食事の準備しているの、テント内の整理状態に気を使わなかつたからでしょう。悪天候の場合を考えて深く反省させられました。国に帰つた後、他の人にも講習会で修得した知識を語り、部の活動に反映させようと思います。

今回の講習会の食料計画ですが、僕達が普通山へ行くときよりも、大変豪華であり、御飯もおいしくいただけただけを感謝します。

各県二名に限られた参加者は、地方へ帰つても全県下の学校に報告することは不可能であり、できまふことなら地方ブロックごとにこのような会を開いてほしいと思います。

パーティの編成については、僕達のパーティは良かった。楽しくやれた。はじめのうち講師に話しかけるのがはつきりかつたが次第に慣れた。また地図とか医療、天気図などについても講義していただきたい。空木岳に縦走できなかったのは残念だ。ザイルやピンチ食の重要性についてはよくわかつたつもりだ。

冬山に登るなどいわれたが、我々の山のように低く、積雪も五〇センチに満たない山で、ラッセルやワカン、グリース等を使わずにのはいと思ふ。テントの中の炊事は初めてであり、せまいテントの中では大変やりにくかつた。

天候が安定していたのか、雨が定期的に夕方降るのは珍らしい。歩いているとき、後から講師が見ていると思うとき、こちない歩き方になる。三点確保について少しわかつてきたように思う。夜テントの中で講師と話し合うのは大変良く、また楽しい。もつともつとテント生活を増してほしい。もつと多くの人がこんな講習会をうけられるようにしたら良からう。食料は素晴らしい私達の食糧問題のヒントになつた。

全員が集つて各県ごとに感想を発表したり、質問したりしたのは聞いている者にとつても各県のクラブ活動やその他がよくわかり、講師の親切な解答もよかつた。

高校生登山技術講習会

——講評——

浜野 正男

八月二日より六日まで、中央アルプス駒ヶ岳に於て行つた、高校生登山技術講習会について、その報告と併せて将来への希望とを述べてみたい。

(1)参加生徒の体力技術について
講師側としては、高校生の体力、技術については、当初かなりの程度に考えていたが、実際には参加生徒が主として二年生であつたため、体力的に抜群という印象もなく、未成熟の感があり、その点期待に反した。従つて山登りの年

(2)山登りの考え方について
概して山登りをスポーツとしてではなく、レクリエーション的に考えているのではないかと思われた。年が若く、これから本当の山登りに入つて行く時期であるが、山岳部として体育部にある以上、ハイキング部ではないという自覚がなにより必要であらう。

(3)高校生の登山について

山の雑誌等に発表される高校生の登山記録を見ると、中には相当高度な技術を身につけ、且つ体力

的にも成人と変らぬ者があると思つたが、これは一部の高校生のみには当てはまることであつて、一般平均からいへば、これら高校山岳部の前衛部隊は異例である。このような前衛部隊は今回の講習会に一人も参加しなかつた。

一般に高校山岳部の行き方としては、先生方が心配されているように、かりに一つの線をきめることができるならば、一例えは夏山であつたら岩場はどの程度、冬山であつたら、スキーとアイゼン技術でどの程度の山をやる、—といつた具合に、事故を皆無にして、且つスポーツ的な最高の山登りを行うことのできる一つの線を決められたら、それが一番望ましいことであらう。

しかし、口では言いやすくとも、それはどこまでが可能であり、高校生として妥当な線であるか、ということとは、容易に決めるに問題である。いづれにしても高校生は大学山岳部をまねたり、一般登山団体の前衛隊になつたりする必要はない。技術は二の次として第一に体力をつけること、それから無益な競争意識は捨て去るべきである。

(4)先生と生徒との問題

山岳部の顧問が、大学山岳部の出身者であれば、まあまあであるが、一般には止むを得ず顧問にさせられている先生が多いようだ。それにも拘らず、事故は直接生命に関係があるため、野球部が試合に負けた責任とは比較にならないほど、苦しい立場に追い込まれることもあり得る。

しかも生徒側は、山にあまりくわしくない先生の言うことは聞きながら、往々にして危険な計画を出された場合、事故を未然に防ぎ得るだけの識見と実際の経験とを先生方は否応なしに要求されることになる。ここに将来の高校山岳部の指導についての研究の余地が残されているように思う。

(5) 今次講習会の成果

今回の講習会は、最初の試みであつたため、計画の立案、遂行の上に種々手違い等もあつたが、結果的には大成功であつたと思う。会としては講師を集めるのが一苦勞であつた。中堅のリーダー級を集めるのだが、冬の西穂高の講習会もあるのでダブル場合が多い。出来得れば講師団(他の競技団体ではコーチ団)をつくり、いつでも出られるメンバーを作つておくべきであらう。

今回もヒマラヤから帰つた人々を中心に、将来ヒマラヤに行けそうな人々でメンバーを構成したが、高校生を対象としては一寸ぜいたくな感があつた。しかし若い生徒たちが三人一人の割合で講師を得て、ともに歩き、身近に教えられ見聞したことは、彼等にとつて非常なプラスになつた筈である。

今回の成功はコーチ団の団結と献身的努力にあつたといえよう。今後出来る限り時間を割いて、卒先参加してほしいと要望する。

来年も是非

京都市内高校 竹内照雄 (教員)

感想と希望

静岡 氏 原 (教員)

結果的には皆がお互に学ぶところが多かつたのではないかと思います。その点から私の言いたいのは、来年もぜひこの講習会を行つてほしいのですが、その場合、内容を充実させることは結構です、しかし内容の程度は絶対に今回の程度に止めるべきだと思います。今回以上の程度にするということになつては、今年参加した人達が出来年度も参加される場合にのみ役立つのであつて、来年度はぜひ別の入達に参加して貰うという趣旨に沿わないことになりそうです。もう少し表現の仕方を変えれば、まだまだ全国ではこの程度の講習会に参加しなければならぬ学校が多くあるから、そのためのものであつてほしいということがあつた。

私は最初から終りまで黙つて他の人の話を傾けるばかりでしたが、この教えられたものが充分帰つてから応用できるか、また利用できるかわかりませんが、生徒の行おうとすることが間違つていくかどうかはすぐ判断できると思います。今まで講習会と名付けるものに夜の十一時まででやつて、そして有意義だつたと思うものは、今回が初めてです。いや十一時までで行うような真剣なものはないかと思ひます。私は筆舌で表現できぬ多くのものを学んで帰れることを感謝するとともに日本山岳会の今後の発展を希望して筆を置きます。

結論として、大層有意義で、またと得られない講習会であつた。①とかく「井の中の蛙」的な状態に陥りやすい我々が、全国的な集りの中で自校及び自県の実状を客観的に眺め、反省することができたことは貴重であつた。

②現高校の山岳部では、あまり高度の技術は要求されなくても良いので、今回のように、ごく基本的技術のみをとり上げただけで、新たな勉強となり、あるいは既習技術の復習整理となり、帰郷しては生徒の指導に当り、精神的な面に於ても、地についた自信となると思われ。

次回、同様の講習会が開かれるならば、左記のことを希望する。①講習会の目標として、全国高校の最大公約数にまで、一刻も早く、すべての高校を引き上げるようにする。高度の技術は、向う数年やらないこと。そして着実な登山部の成長を期待したい。

④そのためには、来年度も、本年と同内容の講習会とし、受講教員は本年参加しない者より選出して、底辺を広げること。

⑤生徒は参加させるならば、卒業前の三年生は除外するのが目的達成には効果的と思われる。

富士山頂研究所

辰 沼 広 吉

本夏設置の富士山頂研究所（別紙一、設立趣旨、二、同規約、及び三、環境生理集談会、山岳医学研究分科会規約を参照のこと）につきましては、厚生省、毎日新聞社、製薬会社その他各方面の御寄付並に日本山岳会研究費によつて運営いたし、八月卅一日無事終了いたしました。ここに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

診療につきましても、各方面の御理解ある御援助により、医師二〇名、看護婦三名、学生五名を得て交代に勤務し、診療患者数約一、五九〇名に達しました。

（別表、診療統計参照）

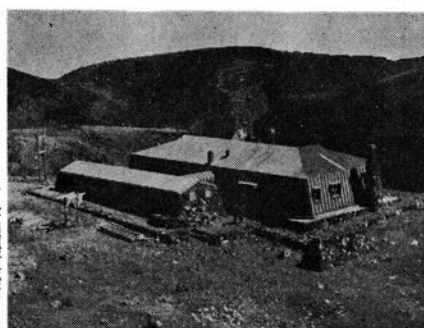
研究に關しては、一般登山者の疲労調査並に山頂気象観測員の、20日間の勤務期間中の生理的消長を追求し、その成績につきましては近く整理のうえ報告の予定であります。

この研究所は、将来山岳に關する医学以外にも広く一般研究の場として開放し、また診療に關しては高山病の研究を主体として行い、山岳診療所のモデルケースとなるよう努力いたしたいと考えて居りますから、今後よろしく御援助のほど御願ひ申し上げます。

（診療統計）

本年富士山登山者数は、富士山麓電鉄の調査によれば一五六、四

七四名で、山頂受診者数は一、五九〇名であるから登山者の約一％が受診したことになる。受診者の主なる症状は左表の如くで、神経系統の障害が高率を示している。即ち頭痛を主訴とする高山病が最も多く、その他の症状はいずれも高山病によつておこつたものが、その大部分であつた。



富士山頂研究所

症 状 別	男	女
	%	%
心 臓 障 害	13.4	16.4
消 化 器 障 害	11.5	10.1
神 經 感 覺 障 害	8.7	5.7
自 律 神 經 系 障 害	4.6	3.3
筋 肉 障 害	6.3	7.3
泌 尿 器 系 障 害	6.9	2.1
神 經 系 的 症 状	20.3	21.3
精 神 的 症 状	8.4	5.6
そ の 他	—	—

（別紙、一）
富士山頂研究所

日本山岳会

現在登山界は登山人口の増加を来し、遭難事故の頻発並に海外登山隊の増加にともない、科学的裏付けを必要とする段階となりました。

この目的のために富士山頂にある厚生省国立公園部所屬になる管理入舎を研究の場として考え、昨年夏実地に使用し研究の実施をしたところその可能性のあることを知るに至りました。そこで本年厚生省と正式に交渉の結果別紙（富士山頂研究所規約）の条件で夏期（七月・八月）使用を許可されました。

実施要項

（一）期間 昭和卅五年七月一日～八月卅一日

（二）研究内容については山岳医学研究分科会（別紙）に於て立案せるものを実施する外に、一般研究者に対し自由に研究の場として開放する。申込は日本山岳会研究部。

（三）診療に關しては日本山岳会会員である医師に依頼する。

（四）山岳医学研究分科会を本年七月十三日午後一時慈恵会医科大学講堂にて開催（日本山岳会後援）

（四）経費は診療に關しては厚生省国立公園部で、研究に關しては日本山岳会に於て負担する。一般研究者は自己負担とする。以上

（別紙、二）

富士山頂研究所規約

名称 富士山頂研究所と稱す。
構成 管理に關しては厚生省国立公園課、運営に關しては日本山岳会に於て、それぞれ実施する。

別に運営委員会を置き管理、運営、予算等につき協議し委員は厚生省国立公園課及び日本山岳会から選出する。

目的

山岳医学其の他に關する総合研究並に夏季診療を行い遭難防止対策を計る。

事業

（一）研究内容については山岳医学研究分科会に於て検討立案し、一般山岳団体及び国外山岳医学研究所との情報交換を行い遭難防止に役立たしめる。

（二）夏季診療は日本山岳会会員である医科大学に依頼し交代に医師を派遣する。

会計

研究所管理に關しては厚生省国立公園課に於て、研究所運営に關しては日本山岳会に於て行つる原則とする。

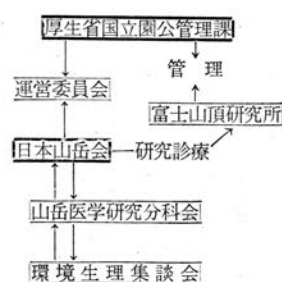
（別紙、三）

環境生理集談会

山岳医学研究分科会

去る昭和卅四年十一月十五日、久野寧教授を会長とする環境生理集談会が京都府立医科大学に於て発足いたしました。

しかるに最近山岳に於ける登山人口の急速な増加とともに遭難も激増して居ります折から其の対象として山岳に關心を御持ちになる先生方からなる山岳医学研究を目的とする一分科会を持つ事の効果について論じ合いました。たまたま日本山岳会に於て本年度から富士山頂研究所設立も実現いたしましたので、これを研究の場として活用する具体案も共に考え、この山岳医学研究分科会を発足することに決定いたしましたので、同様の各位の研究御発表、その他の機関として御利用いたされれば幸いに存じます。（以下規約省略）



▽環境生理集談会例会報告

本年度は七月十三日、東京慈恵会医科大学講堂に於て、第2回環境生理集談会及び、国際生気象生気候学会例会を開催し、山の医学に関するシンポジウムを行いました。

山の医学に関する

シンポジウム

七月十三日、慈恵会医科大学講堂

(日本山岳会後援)

司会：辰沼広吉

1. 山の生気候：

気象研究所 神山恵三

2. 低圧環境における肺循環：

慶大・医・外科 石川七郎

3. 高地順応について：

慈恵医大・生理 杉本良一

4. 凍傷及び凍死について：

京都府医大・生理 吉村寿人

5. 富士山頂の診療経験：

東京医大・外科 早田茂博

(各題二〇分) 以上



カットは山下一夫氏

日本山岳協会

その後

渡辺公平

日本山岳協会の設立経過及び同会規約等については会報二〇六号に、また本会よりの役員追加については会報二〇八号に、そして五月十八日行われた発会式については会報二〇九号にそれぞれあらましを御伝えしたが、その後の同会運営その他について、会員各位に周知されていない点もあるので、補足的説明を簡単にしておきます。

本会及び日本山岳連盟から申請中であった日本山岳協会の体協加盟の件が三月三十一日の体協評議員会で承認されたため、四月廿五日日本会館において設立総会を開催、規約及び役員を別項の通り、また事務所を本会内に置くことなどを決定、五月一日付で次のような挨拶状を関係各方面に送った。

日本山岳協会の発足について

戦後に於ける日本の登山界の発展は、まことに驚ろくべきものがあります。登山者の数も年

毎に増加し、国民のあらゆる階層、職業にわたり普及してきました。特に青年層の登山者の数はその実数の把握に困難なほどの多きにのぼっています。この大衆的なスポーツの一つである登山の健全な発展と、質の向上をはかり、不幸な遭難事故を未然に防止することはわれわれ登山者に与えられた大きな任務といわねばなりません。

この任務を達成するため、永年登山者の仲間間で問題となつていました社団法人日本山岳会と全日本山岳連盟との関係は、財団法人日本体育協会の好意的了解により、昨年春以来両者が数次に亘り慎重に協議を重ね、相互の善意によつてこゝに新しく日本山岳会協会の設立をみるに至りました。

従つて日本山岳会と全日本山岳連盟は日本登山協会の両翼を担う実行団体としてこれに加盟し日本登山界のために、それぞれの分野において協力することとを約しております。

この新発足した日本山岳協会は体協の評議委員会理事会の承認を得て日本山岳会に代り、体協の加盟団体として四月一日より体協の登山部門を担当することになりました。

新協会は心を新たにし全国の登山者のために微力をつくす覚悟であります。

こゝに登山に関係ある各位にこのことをお伝えすると共に今後の御指導をお願いいたく御通知致します。

昭和三十五年五月一日

日本山岳協会

続いて五月十八日午後一時より、既報の如く体協会議室において協会の発会式を行い、高橋専務理事から経過報告、日高、尾関副会長から挨拶があり、体協山辺理事から激励の挨拶、九州その他各地区代表から祝辞が述べられて、協会は本格的にその目標に向つて動き出した。

六月廿八日には協会事務所において理事会を開催。

①夏山登山安全運動を国鉄その他の後援により七月廿一日より八月廿日まで展開するため、各都道府県岳連に対し運動要項を指示、自発的な活動な要請することと決定。

②第二回国立公園大会(厚生省主催)に参加することを決定。七月廿一日、廿二の両日、富士山麓胎内地区で開催、日高副会長、百瀬山梨岳連会長、小島都岳連副会長ら約五十名が参加した。(前号会報、日高会長報告すみ)

③海外登山関係、ヒマラルチュリヤの成功を祝し、ジュガルル・ヒマ

ール岳連隊を来年派遣したい旨岳連側から表明、

その他、協会事務処理の促進化、第十五回国体の本部役員数について協議、

後者については現地側の希望もあり、会長、副会長、専務理事、技術委員長、同副委員長、CL四名、国体委員四〜五名(内二名は長野県より古原初美氏、地元九州より一名)とすることに決定した。

日本山岳協会役員名簿

会 長	武田久吉
副会長	(日本山岳会) 日高信六郎 尾関 広
専務理事	浜野正男 高橋定昌
理事	入沢文明 星野 重
	渡辺公平 高塚和雄
	折井健一 斎藤清太郎
	金坂一郎 羽賀正太郎
	後藤幹次 鎌田 久
	藤島 玄 大石 実
	三井松男 武内重雄
	津田周二 橋本三八
	高山忠四朗 村松 清
	中田勇吉 松長晴利
監 事	太田 敬 鈴木林治



カブトは 立山午王
青くら 佐伯富男氏寄贈

日本山岳会富山支部の招請で、田部重治氏と私の二人は、八月五日の夜行で、六日魚津から宇奈月に入り、そこで富山支部役員の方々と合して、黒部奥に向つた。一行二十数人、電力の軌道で宇奈月から榎平へ、それから祖母谷に入り祖母谷温泉の下手に最近出来た名剣温泉に着いて一泊。自然の出湯を楽しんで後、晩酌を交しながら座談会をやつた。

月のよい夜で、山、森林、溪流が美しく光り、涼冷の山気は頗る快調であつた。

小学校の講堂で、黒部の講演会をした。田部氏は溪の話、私は黒部の話をした。

その夜は宇奈月温泉河内屋旅館で宿泊、宇奈月町長河内氏の歓待を受けた。翌八月八日には、田部氏は滑川の親戚へ回られ、私は久しぶりで終戦後の立山登山をした。そして九日の夜行で帰京した。僅か四、五日の旅行であつたが天候に恵まれ非常に快適であつた。

名剣温泉と云うのは私が今年初めて知つた温泉である。祖母谷温

富山支部役員総会に出席して

冠 松 次 郎

泉から下流、黒部の落口までは、谷は狭く森林と溪流に埋められていたので、こんな温泉の出来ることは予想していなかつた。しかし来て見ると、相当広い段丘の上に七八十人位収容できる山小屋式のよい温泉宿ができた。野天の湯場もあれば内湯もある。二階建の居心地のよい処で、谷末には高く毛勝岳の一角、西谷の頭が大きく見えていた。丁度明月で溪の景色はひとしをよかつた。

この下手の猿飛の上にも温泉宿が出来た。それだから黒部下流の

温泉は、宇奈月、黒薙、錦繡、鐘釣、猿飛、名剣、祖母谷と七つあるわけで、それにアノ原を入れると黒部八湯というところだ。

私は立山へ最後に登つたのは終戦の少し前で、その時には栗果野まで電車が入つていた。今度来てみると、それから対岸の千寿が原まで延び、ケーブルと連絡して弥陀が原に上つている。

弥陀が原には坦々とした道が出来て、弘法、追分を横目にして追分の上手の丸山の上に至つてい

る。そこには広大な弥陀が原ホテルがある。そこからはゴロタ石で道は甚だ悪く小型バスで天狗平の小屋まで、さらにジープで室堂平に上れるようになっていた。

天狗平と室堂の間の大谷では、どうしても雪渓を横切らなければならぬ。そこが難場とされている。大谷付近ではいま立山の方から黒部へ貫くトンネルの試掘のためボーリングが行われている。弥陀が原ホテルまで来て私は、付近の色彩の賑やかさに驚かされた。それは山の色彩ではなく、人

にまつわる様々な色だ。登山姿の人はあまり見られず、みな赤、青、黄、紫などの衣類やパラソルを着かざつた。若い男女や小供の群で、サンダル、ハイヒールなどで草地を練り歩いているものが多い。立山もハイカーで埋つていたので。私は上高地を思い出した。色々の天幕も所々に見受けられる。

しかしここで特筆すべきことは、立山一帯で厳格なほど広告をゆるさないことだ。ベンチを寄贈したい。指導標を立てさせてくれなどという広告目的の業者の申出は皆拒絶している。それゆえそんなものは一つも見受けなかつた。これは恐らく黒部立山を通じて行われることで、非常に結構なことだと思つた。

いま立山の東面では水力電気の工事が盛んである。やがて数年の後には一大山上湖が出現し、都会から歩かずに黒部に入り、ケーブルで立山へ登れるようになると思う。そうしたら実に大変なことになる。恐らく他に比類のない国際的な大観光地ができると思う。そうすると今の交通機関では遊山客を呑みきれなくなる。宿舎の設備も同じである。

関係当局や立山開発鉄道では、今日その発展計画で頭をいためて

いる。

さて私は、東京を出るときから足の捻挫でなやんでいた。しかし折角の招請なので押しきつて黒部へ行き、さらに立山に登つた。

同行者は黒部から行をともにした富山支部の理事、野島福三郎君で、弥陀が原ホテルでは青くらの佐伯富男君がともに行つてくれることになった。足の具合が悪ければ背負つて頂上まで登りますよと云つてくれた。しかし私は室堂まで来て、私をめぐつてずらりと姿を見せている立山の顔を見て無性にうれしくなつた。

立山主峰は勿論、別山、浄土山、大目平、大目岳、奥大目岳、その奥の方から剣岳が磨きあげたような美しい顔を出して微笑していった。早月尾根も見えた。私はこの山々を見、室堂平の草地を歩いていくうちに、それで充分になつた。去年は黒部の方から立山の姿を思いきり見た。今度は西の方面の繁盛と昔に変わらぬ立山山群の麗姿を見てほんとうに満足した。私はそれから三、四時間というもの、室堂平から天狗平の高原をそぞろ歩いて弥陀が原のホテルに帰り、また乗物に身を託して午後三時に富山に着き、夜行で十日朝帰京した。

木暮さんの著書

小野 幸

元会長、木暮理太郎氏の著書といえ、**「山の憶ひ出」**をまず思いうかべるでしょうが、この他にもう一つ、山には関係ないのですが、明治四十年一月発行の**「泰西名画鑑」**のあることを知っている会員諸氏は今では少ないと思いますのでこの本についてのメモを記してみます。数年前、木暮未亡人を吉祥寺のお宅に訪問しましたとき、この**「名画鑑」**の話が出ましたが、「宅にも以前一冊あつたのですが、今はございません」と申されておりました。きつと戦災でお焼きになったのではないかと思います。

この**「泰西名画鑑」**は菊判、総クロス二〇四頁、他に口絵アト紙二四葉（とじ込み）となつています。発行は明治四十一年三月三日、発行所は東京府小石川区久堅町一〇八、日本葉書会で、定価は九十五銭とあります。本の内容は名の通り西洋の名画の解説といつたもので、当時、氏は雑誌「ハガキ文学」の編集者として同誌に

連載した原稿をまとめて、この単行本にされたものです。「自序」として次の文が最初のページに記されております。

自序

曠世の大家絶代の巨匠は元より言ふに及ばず、尋常者流の手になりしものと雖も、美術上の優秀なる制作物は、その絵画なると彫刻なると、はた建築なるとを問はず、忠実なる模倣に依りてすら、其真髄は伝へ難しと称せらる。何ぞ況んやこれが写真版に至りては、大抵其大さを減ずると共に、立体は一の平面図と化し、僅に一面の美を想像し得るのみ。絵画の場合に於ては稍や之に優るものあり、構図や形態や画家の思想や、是等は損害を蒙むること渺きに似たり。されど筆致の真は半以上を失ひ、色彩の如きは全然見ることを得ず。而も色彩を奪はれたる絵画は、其生命をも併せて失ふこと多し。此の如きは譬へば死せる美人と同じく、残る所は唯だ形骸の美に過ぎざる也。これ写真版を介して泰西の名画を賞美せんとする人の、均しく感ずる欠点にして、誠に隔靴搔痒の嘆に堪えざるも、文字に依りて之を味ははんは、更に至難の

事に属す。よしや其説明は微に入り細を穿ちて如何に巧妙を極むるとも、一読して其画の明瞭なる觀念を構成し得る者は稀なるべし。此点に於て写真版は大なる便利を有せり。更に之を補ふに説明を以てせば、庶くは其真を把持するに幾からむか。予がこの小著敢て此目的を充たせりとは謂はじ、予自らも亦其不完全なるを耻づ。然れども勞甚だ少なからざるものなり。憾むらくは研究の日尚ほ浅く、識の広からざることを。渺たる小冊子、敢て之を専門の士に薦むると言はゞ、恐らく厚顔自己を知らざるの譏を免かれざる可し。若し予と同じく美術の愛好者にして、本書に依りて多少の益する所あらば、著者の望や足れり。

明治四十一年二月

東京本郷の僑居にて

木暮理太郎 識

以上が自序の全文であります。次に「例言」があり、目次に続きます。目次には、目次、口絵、解説、附録となつており、附録には「英國絵画小史」となつています。この小史は「ターナー氏の美術略史」を基とし、他に二三の書を参考して記述せるもの（例言より）とあります。

▽

それからこれは木暮さんの著書ではありませんが、中村不折の「画道一斑」の附録に、木暮さんの筆で「東西名匠教訓」というのが書かれていて、「画道一斑」の二六八頁から最終頁の二九〇頁まで（余分なことです）が、この本の目次にある頁の記載は誤つています（に亘つて載せてあります。なお、後記とも見るべきものが最終頁に次のように記してあります。

千羊の皮は一狐の腋に如かず、片鱗も能く太牢の美を味ふに足るべし。名工鉅匠の手になれるいみじき鑿の香筆の句は、一画一筆の粗なるものと雖も、細に入り微を穿ち、其神髓を伝へて、纏綿たる韻致、躍如たる神采、見る者をして愛惜措く能はざらしむ。これ独り其手法に、又能く片言隻句にして直に肯綮に当り、單刀直入して敵人の喉を突く概あり。此の如きは皆これ古人が自家の天才と経験とに依りて得來りたるもの、之を熟読玩味せば得る所のもの蓋し鮮少にあらずと信ず。即ち茲に東西名匠の遺訓を列挙して、読者と共に其利益を享受せんとする所以なり。

(木暮理太郎)

とあります。因みにこの本は、

四六版、明治三十九年十月二十二日発行、発行所はやはり日本葉書会で、定価は八十五銭とあります。（三五・八・七）

木暮翁碑除幕式

甲州金山平に新たに建碑された木暮翁碑の除幕式は、十月八日（土）午後二時から碑前に於て、関係者有志多数参列して行われた。木暮翁長女美枝子さんによつて幕が引かれた。

本会から、日高会長、藤島敏男、折井健一、金坂一郎、芳野起夫、加藤元一、神谷恭、野口末延、松本熊次郎、牧野衛、小野幸、安彦六郎、坂倉登喜子、碑の設計者佐藤久一朗、婦人部、霧の旅会、石楠花山岳会の関係各氏。信濃支部高山忠四朗、清水悟朗氏。地元山梨県岳連、並びに山梨支部の三井松男、百瀬舜太郎両氏等が除幕式記念行事に参加した。

◇ ◇

会費のお払込を願います
本年度会費お納め下さい

（振替東京四八二九）

雪の北アルプス

横断記(下)

内山数雄

風が強く当つて雪が飛んで儼松の出ている辺りを通ると、雷鳥が大吹雪の中を飛んで、何もない大雪原に落ちていつた。

寒さは骨身にしむ。猟師はカンジキの紐がとけても結ぶことができない。ザックからシャツを出して着ようと思うが取出せない。目も口もあけられない吹雪の中で、疲れたから休憩しようかというところ、猟師は休むと足が凍るから歩行を止めてはいけないう。これではとても頂上へは行けぬ」と、幾度も思ったが、今は退くことも進むこともできない。口中も変になつてものをいうのもいやになり、絶望に続いて死の予感が迫る。「もうお互いに覚悟しなければならぬかなあ」笹川君の耳に口を当てて私がいうと「絶望！」と笹川君もただ一言！

八、遂に冬の白馬岳頂上を極む

夏の記憶によると、もう頂上に達しなければならぬのに、猟師はまだまだという。「登山者は案内者の言のみを信じていることはできない」と聞いているから、彼等

はコースを間違えていたのでないかと心配した。このボーズ池から頂上へ行くには「一ツ岩」または「離れ岩」があり、一歩右すれば黒部の上流へ、一歩左すれば白馬岳の頂上へ出るのである。猟師はよくそれを知っていた。風の絶え間に息を殺して進む一行は、ただ峰に「ごろごろと鳴る凄惨い音を聞きながら一刻も早く頂上に達しよう」と懸命の努力を続けた。そのうちに風が少し軟いできた。この間にと、さらに最後の勇を鼓して進めば、漸く頂上の小屋の所に

出た。

あゝその時の嬉しさ、一行は踊りあがつて喜んだ。跳ねた。飛んだ。笹川君と手に手を取つて「天佑、天佑」の叫びを發した。万歳を三唱して、祝砲を放つた。私はスキーを、猟師は銃を持つて笹川君に写真をとつてももらつた。今まで顔色のなかつた一行は、頂上に達した候もよくなつて元氣百倍である。氷砂糖など食べるうちに、嬉し涙がぼろぼろと頬を伝つて流れた。

風に吹き飛ばされて雪の少しもない白馬岳頂上に立つたのは午前九時二十分であった。雪雲から全身を現した杓子岳と鐘が岳の美観は一種崇峻の感に打たれる。西方朝日岳を隔てて越中平野が薄く見え、黒部川と常願寺川とが黒く帯を曳いたように認められた。南方は雲が多く、槍ヶ岳、穂高連峰と、西北方の戸隠、妙高連山を見ることができなかつた。白雪皚々たる白馬岳の絶嶺に立ち、身は仙境にある思いであるが、寒気は烈

しい。空模様も悪く長く止まることはできない。

九、日本一の滑走場

県営小屋は屋根だけ出ていて、屋根石が一つ一つ見えていた。私達の最も心配したのは、小雪溪が凍っているかどうかであつたが、幸運にも凍っていないかつた。しかも二十七日の泡雪が鏡のように凍つた上に積つたのでスキーにはもつてこいであつた。笹川君と私は思うがままに滑走した。猟師もみのを敷いて、尻滑りや尻マークをはじめる。半制動で滑走すると片方の足がだるくなる。ステムボーゲンをやつて反対の方へ半制動で滑走する。どこまで滑走してもきりがない。ここぞスキー滑走場としてはおそろく日本随一であろう。夏は雪溪の割目が恐ろしかつたが、今はそれがいい。両側の断崖から雪崩が少しづつ落ちていたが、私等の通過したときは危険がなかつた。この純潔清絶の大雪溪がスキーの大楽園となるのも、ここ数年のうちであらうと思う。

二人は白馬尻まで二十五分位で滑走し、酒精コンロで紅茶をつくつて飲み、キャラメルを頬張つてみると、三人の人も夫もやつてきてみなスキーの威力を嘆賞していた。顧り見れば、雲霧深く白馬の山嶺をつつみ、山容は全く見えな

十、雪中白馬の登山者へ

い。いまごろ頂上を越えていたら、どんなに困難をしなければならなかつたらうと、お互に天佑を喜びつつ四谷へ向つて急行した。途中、長走沢と中山沢のあたりは泡雪の降る前の雪崩らしいのが、

身を毛もよだつたばかりに出ていた。さすがの笹川君も「ここまできて雪崩に死んでならんから注意しよう」と、二人は周到に注意をして、数個所の危険地を通過したが、これだけでも大きな仕事であつた。でも途中からスキーの跡が数条あつて、我党の士がここまで来るのかと思うと実に愉快であつた。

四谷着は午後三時頃で、猟師は三時間遅れて着いた。その夜の一行の喜びは何に譬えよう。兎の鉈料理、洗面器の湯湯の話から、絶嶺を極めた時の愉快さと、話は尽きなかつた。

あくれば三日の朝、猟師は糸魚川街道を帰ることにした。土地の写真屋を呼んで記念撮影をする

と、四谷の人々は黒山のように集つて、「あれが白馬を越えてきた人だ。あの色の黒いのが」と笑つていた。やがて商売以上に誠の真心を捧げてくれた勇敢忠実な猟師と、名残り惜しい袂を分つて、私等は馬ソリに乗つて大町へ出る。途中大町の山岳会の幹事、手塚順一郎氏の歓迎を受けた。聞けば氏は三日前から出迎へに出ていたとのこと、心から感謝の意を表した。

本稿については前号で解説した。内山氏は明治十八年新潟県に生れ、大正六年以後教職に在つて、伊吹山、立山、樺太鈴谷岳等でスキーを試み、富山高校(旧制)奉職中、欧州外遊フィンランド、スエーデン、ノルウェーなどに遊び、帰朝後、大阪朝日会館で北欧のスキーについて講演をされた。現在、郷里の新潟県岩船郡神納村に自適して居られる。

(編者付記)

「この辺で雨飾山といえ、黒姫山とともに村人の測候所みたいなものでして。山に雲がかつたから、やれ雨が降るの、天気が変わるのといつて、それが妙によく当るのです。そうですな、この辺ではあまり雨飾山へ登る人はいません。まあ、登るのは年に一度のお祭り（五月上旬）のときだけですよ……」

と、先年雨飾山から繁倉尾根を経て金山へ縦走したとき、たまたま山麓の大網で聞いた言葉を思い出して、その行事に参加しようとして地元へ照会したところ

「私の村では、この時期には必ず登拝することになっていますが、日がいつと定まつて居らず、皆の都合のよいときを選んで登りますので、時日の決まつていないところを御知らせしましょう」ということで、戸土の部落の赤野奇策さんを紹介してもらつた。

そこで、早速安曇野を振出しに平岩から横川沿いの林道を経て、八百平經由戸土に向つたが、運の悪いときは仕方のないもので、前日まで快晴つづきの天気がいよいよ登る五月五日には、ひどい土砂降りとなつて、むなしく引返えさざるを得なくなつてしまつた。

×

考えてみると、折角プランを立てて、そのままにしてしまうのは残念なので、三ヶ月経つた、その年の八月、残雪期とはちがつて数も深いだろうが、そのつもりで登つてみようじやないか、と同志を集めて五人で行くことにした。

こんどは寄り道をせず、糸魚川

から別所までバスで戸土に向つた。そうして戸土着が朝の九時半。朝食を済ませて十時十分には登山にかつた。

仙翁沢までは、人も知る湯峠越の小谷街道。ここで休んでいると、予め頼んでおいた赤野散司という猟師が、お案内いたしまして、と後からやつてきた。

「残雪期には、仙翁沢をつめて簡単に稜線に出られますが、夏は藪が深く、とてもだめです。実は私も夏は通つたことがあります、が、前沢から尾根にとりついてみましょう。」

そういつてわれわれを営林署の監視歩道に導いた。前沢までかれ

雨飾山の西南面

中 村 謙

これ一時間もかかつたろうか。地図で見ると、湯峠への小谷街道を行つた方がよほど近いように見えるが、街道からここまで距離的には短くても、傾斜が急で、なかなか過ることは容易ではないといふ。

われわれは、前沢の「前」のところに入つて、枝沢を過ることにした。前沢の本流は、非常に荒れた沢で岩がごろごろしている

が、枝沢の方は、むしろ素直な沢で、快適な沢登りを楽しむことができた。しばらくして沢は伏流となり、磊々たる岩また岩を伝うようになる。すると間もなく大崩の下に達し、再び水があらわれ出した。そのちよつと先きで沢は二分するが、われわれは左俣を辿つた。

まつたこの濁沢で、水は少しも無く、イタドリは両側から一杯に沢をおおつていた。伏流が尽きてふたたび水があらわれたところで雨が急に降り出してきた。一時はだめかなと思つたが、それも束の間、どうやらたいしたこともなさそうなので、なおも潮行をつづけ

た。二時五十分、いよいよ最後の水場と分れて石のガラガラした急峻な悪場にかつた。誰れかが浮石を落したら最後、忽ち石なだれが

起る気配なので、みんな慎重に一歩々々登つて行く。そうして、先頭がようやく眺望のよいテラスに辿りついたと思う瞬間だつた。突然、ガラガラという石なだれの音が聞えた。

「やつたナ」と思つて背後を振りかえると、石は土煙りを上げながら、友をよんで、猛烈な勢いで下へ下へと落ちてゆくのであつた。

最後の者が浮石に手をかけたのが石なだれのもつた。誰れ一人怪我をしたものがなかつたのは幸いだつた。

×

ガラ場を過ぎると、岩場に達した。仰ぐとかなり急峻な岩場だが、ホールドもスタンスも充分で、たいしたことはないかつた。そこを登り切る、こんどは岳樺の林に入り、スズ竹が密生しているの、その急斜面を突破するには相当骨を折らなければならなかつた。

かくて稜線に辿りついたのは、すでに六時半近くだつた。稜線には、明滅しながらも、いくらか踏跡らしいものがついていて、日没も追つてくるので、われわれは藪を漕ぎながら先を急いだ。

七時十分、一七四〇米の峰にく。 「ここが、祭りのとき偶々天気が悪くて頂上へ行けないと、村の衆が遙拝して帰る二ノ肩です」と赤野はいふ。しかし本当の二ノ肩は、それから岩峰を越えてなお二、三十分登つたところだつた。

さすがに暮れにくい夏の日も、われわれが本当の二ノ肩につくまでは、とつぱら暮れ果てて、脚下には村の灯が螢の光のようにボツボツと光つていた。

二ノ肩をすぎると、剣の刃渡りが始まる。ほんのわずかな間ではあるが、風の強い日には怖ろしいところだそう。

「昼間だつたら、怖ろしいかも知れないが、こんな暗闇では脚下が見えないからネ……」とわれわれは案外平気だつた。そうして、目的の雨飾山の頂上についたのが、なんと夜の八時だつた。

見渡す三百六十度の展望！ 遠い山々はあたかもシルエットの如

く、薄墨でくつきりと、その輪郭を画き出し、脚下の村落は電灯の光でありありと、それがどこであるかを明示している。

「あれ、あのチカチカするのはなんだろ……。村の娘たちが懐中電灯でわれわれにサインを送っているのだから」

と、われわれは冗談を言いながら、ひとしきりこれに応じてみた

あたりは、まつたく静寂そのもので、天には星がきらめき、涼しい風が、そよそよとわれわれの頬をかすめるばかりだ。

「夜の雨飾山もいいなあ！」と、腹捲えをして下山にかつたのは、それから四十分の後だつた。

一ノ肩から中ノ池、夫婦杉、見晴台を経て、鉾度倉沢までのあの急坂を、雨あけの下り道だから、意外に時間がかかつてしまつて、梶山新湯に達したときには、午前二時半を過ぎていた。

「冷御飯でもいいから、あつたら食べさせて下さい」と宿で頼んだところ

「温かい方がよかつた」といつて、宿のおばさんは寝むそうな目をして、わざわざ飯を焚いてくれた。

×

眼をさませば外はざんざん降り。翌日は姫川温泉にもう一泊したが、雨は東京に帰りついてもまだ止まなかつた。

「もし」一日おくれたら、またもおじやんになるところだつた」と、われわれはお互に顔を見合せた。

(三四・八)

札幌だより

望月達夫

たしか深田さんも日本百名山の一つに数え上げていた後方羊蹄山は、俱知安あたりから仰いでも、また中山峠から眺めても、なかなか立派な姿をしている。この頂にたつたのは八月十四日の早曉で、稀にみる快晴に恵まれ、太平洋と日本海を同時に眺め、遠くは日高山脈までみとめられるような大観に我を忘れて恍惚とした。戦争中空知の平野から眺めた暑寒別岳は雲海の上に浮び、ニセコは朝陽をいつぱいにうけて輝き、その左手遠く伊藤さんの「北の山」に書かれている狩場山が横たわっていた。

頂上にはイワギキョウの青花が満開で、二時間以上も昼寝をしゆつくり休んだ。先頃登った樽前山や近くは札幌岳、空沼岳が無意根のゆつたりした頂の右に望まれ余市岳の肩には一かけらの残雪が光っていた。比羅夫口から登った我々は真狩口を下る。人ツ気がなくてなおよろしい。洞爺湖を真正面に見乍ら段々高度が下る。遙か遠く、内浦湾をへだてて見える山波は駒ヶ岳であろうか。

七月の末に芦別岳へ登った時は終日濃霧のなかを上下し、お花鳥を賞したに過ぎなかつたのと比べて、羊蹄ではまったく天候に恵まれたのだ。同行者は会員小林義正氏が紹介して下さった丸善支店の高沢君と僕の店の者二人。その後網走の方へ出張した折、知床半島の山々や斜里岳が非常にはつきり眺められた。知床はなかなか魅力があるので、少し時日に余裕をつくつて出かけたいと思っている。(一九六〇・八月)



会員通信

カットは上田哲農氏

再び小川山へ

野口末延

甲州金山に於ける、故木暮先生の碑前祭と、レリーフ移転の協議の集りに出席した翌早朝、六月二十六日、会員の山内巖氏と同行、夜明けとともに出発し、小川山に登った。途中の樹林は昨夏の台風

の被害で、意外に倒木が多く、たびたび踏跡を失い、その労苦は一年登ったときの比ではなかつた。帰路を懸念して用意して付けた布片すら、下りには見失うほどであつたが、頂上には空缶一つ落ちていず、四辺に咲いた可憐な花の様子から見ても、いかにも荒れていない静寂な山の感じを、再び味わうことができた。

生憎く曇天であつたが、登路の岩上から一瞬見えた甲斐駒、仙丈は特に印象的で、頂上では八ヶ岳の赤岳と横岳、金峰山の五丈石を見たのと、北方に千曲川の流域が俯瞰出来たのがよかった。雨に会わないで幸いだつた。

何十年前からの奥秩父の山は斯くあつたろう、と思われる此小川山も、やがては伐採が入つて、ミズガキ山のように、その景色を変えてしまふのかと思うと淋しく思われる。(三五、六、二六)

杉の峯より不忘山

松本熊次郎

野口末延

仙台の会員、登坂信雄氏の計画に参加、七月十日の朝、仙台を発つて賽の積まで車、ここには既に乗用車やバスが十数台停つて居り、大勢の人が右往左往している。

吾々は御釜より流れ落ちる濁川の沢を渡つた所にあるカモシカ温泉で昼食、熊野岳に登つた。夏とはいいなながら肌寒く、濃霧で何も見えなかつたが、さすがに珍らしい植物が多く、登つた甲斐があつた。翌十一日は、早朝カモシカ温泉を出て、濃霧中を刈田岳へ登り、それより南に杉の峯、屏風岳、南屏風を経て、此山塊の最南端の不忘山に登り、硯石に下山、バスで白石へ出たのであるが、途中、数人の土地の人らしい一組と会つただけなのと、尾根筋は晴れて眺望が好く、それに花のさかりで、杉の峯と屏風岳の鞍部の芝草平と称する湿原の池塘は小さきまぎまぎ、丁度ワタスゲが咲いて居り、実に気分の良い場所、楽しい山旅ができた。(三五、七、一一)

空木岳と南駒ヶ岳

野口末延

梅雨明けすぐに出かける予定でいたところ、都合で遅くなつてしまつたが、幸い天気、眺望、そして花にも恵まれた此山行は、会員の名須川浩君と令息の征馬君と私の三人、それにポーターが一名。伊勢湾台風で荒れた此方面も、越百山の方の様子が、全然判らないため、結局、駒ヶ根鉾泉から往復することになった。

空木小舎は夏季中、赤穂の駒峯山岳会で管理し、維持費として一人百円を徴収しているが、小舎の周辺まで掃除が行届き、付近のお花畑も荒らされていないのが何よりよかった。聞くところによれば登山者中には、早立ちして維持費を置かないものもあり、食料、寝具を持つて来ない人もあるとかで困っていた。

赤穂で頼んだ、堺沢虎市君(五八才)は長年の経験の持主で、親切でもあり大へん有難かつた。(三五、七、三二)

利尻岳

村上金吾

利尻岳(山日記)といつたり、利尻山(五万分地形図)といつたり、標高も一、七一九米とあつたり一、七四八米(稚内市役所発行鳥瞰図)とあつたりまちまち。稚内との交通関係も時刻表を見ただけでは了解しにくい。交通公社案内所でさえ、稚内鷺泊間往復乗船券を作つて売つてくれた。ところが実際には往復の船はなく、かえりの船は鷺泊から礼文をまわり、また利尻の杓形へ寄つて稚内へ帰るのである。そういうことが現地へいつて見てはじめてわかつたわけだつた。ただ予想したよりも島内の交通はよく、島の周囲海岸線

に沿うてバスが走っている。

準急「利尻」で朝稚内着、七時三〇分発の利尻丸で鴛泊へは一時半着、利尻岳は宿泊可能な小屋がないので当日の登山を見あわせ、杓形まで歩いて（バスもあるが）泊った。

島はニシン不漁でコンブに依存「拾い昆布規程」が道端に掲示してあった。

翌日二時半出発利尻岳に向う。早発のわけは十二時までに鴛泊におりて船に乗るつもりだったから。歩道入口あたりで夜があけ、大雨の予報に反し快晴となる。トドマツ、エゾマツの林、ネマガリダケ、ミヤコザサのやぶにコマドリ、ウグイス、キジバトがなく。五葉の坂、見晴台、礼文岩、駒大ヶ坂、夜明しの坂、利尻三眺山、背負子投、親知らず子知らずと、なかなか名勝過剰の感がある。

八合目で鴛泊からの登山路と合流、つい最初の予定を放棄してゆつくりし、頂上着九時半ごろ、目の下に姫沼、ベシ岬灯台が見え、近く礼文島、天塩平野のサロベツ川、ペンケ沼、パンケ沼など、遠くカラフトの島影を望む。エゾツツジ、ミヤマアズマギク、ミヤマオトコモギ、ムカゴトラノオ、オンタデ、イワブクロ、イワギキョウなどが目につく。リシリを冠

した植物も多いはずだがお目にかかれない。

降路は泊コース、登降者多し。三合目に甘露泉の冷水がある。鴛泊着二時半、稚内行の船は島内どこからもないので泊り。

利尻岳登山路の難易は鴛泊、杓形、鬼脇の順にむずかしく危険も伴うといわれる。普通登り五時間、降り三時間半、登山許可証の交付をうけることになっている。島にはヘビ、クマのいないことも特記したい。

翌日十二時出帆の利尻丸を割愛して利尻稚内間のエア・タクシーでとぶ。所要時間二〇分。

(七月二日～二四日)

会津駒・袖沢の遡登

小林 智明

会員の田辺修君と二人で宿願の銀山、袖沢を遡登しました。只見川上流にとり残されたこの大きな渓谷は、現在は奥只見電源開発により、不動滝の下までトラック道路が出来ております。

八月四日、小出町より奥只見ダム現場まで新潟福田組の好意によりトラックに便乗、近代開発産業の粋を集めた八崎の工事現場を横ぎり、五百米ほど下流に落ちる袖沢へトンネルをぬけて入りまし

た。

南沢合合から不動滝下まで、今度は大成建設の若い現場の技師さんの好意で再びトラックで運んでもらい、入山第一日は袖沢へ深々と入り込んで、中門沢合合より一杆ばかり下流の右岸台地に野営しました。

翌五日は、ムジナックボ沢（坪入山、窓明山、三ツ岩を源流にする沢）を過ぎて目ざす本流（ミカグラ沢）へ入りました。この日は銀山と檜枝岐の二人の岩魚釣りに会い面白い日でした。袖沢の上流には岩魚のほれない滝もいくつありましたが、実際はほとんど源流まで岩魚が棲んでいます。以前檜枝岐の岩魚釣りが放したものでそうです。

午後二時過ぎに夕立、沢は濁流となり、ムジナックボ沢合合より一杆ばかり上流左岸の滝見の泊り場へ待避、そのまゝ泊り。

六日、袖沢本流の核心に入りました。連続する滝、ナメ、沢いっぱいに清流の走る花崗岩盤と、広い上、越、会の山中でもちよつと類を見ぬほどの美渓でした。

この日も同じく二時過ぎに雷鳴豪雨あり、駒ヶ岳まで余すところ二時間行程の地点に遡っていたのですが、沢は一瞬のうちに数十倍の水量にふくれあがり、折から場

所が悪く、三時間の立往生をして、減水の後泊り場を見つけて、寒い源流の第三夜。

七日、駒まで二時間半の源流歩きでしたが、なお二十段くらいナメ滝が連続し、あきれるやら感嘆するやらで、朝靄をつき清冽な冷たい水をじやぶじやぶやり、オニアザミ、ハクサンフウロの紫が美しい源流から、コバイケイ草のまじる笹藪をわけ、九時三十分、会津駒ヶ岳の一等三角点に這い上りました。

檜枝岐は立派な小学校、役場、ホテルと近代的に様変わりしてしま、わずかに路傍に立ち並ぶ石墓とソバ畑が昔日の名残りをとめております。

帰途、湯花温泉から唐沢峠と云う山百合の咲き乱れる小さな峠を越え、西根川奥の木賊温泉に宿り、山脈の汗を流しました。翌日は中山峠をバスで越え、那須山群が見えだす頃より暑くなり、田島、若松を回つて南会津の山脈を終りました。

▽

袖沢の記録は珍らしい。寡聞であるが、昭和初年夏、小林太刀夫氏（一高旅行部）が単身、檜枝岐から駒に登り、沢の途中一泊の後、銀山、須原口へ下つて居られるのを聞くのみであ

る。そのときは沢の中途から林道があつたということであるから、当時探掘中の中門沢鉱山（銅）の探鉱道があつたのかもしれない。このときの記録は発表されないでしまった。

その後、この沢を登降した人のあることを聞かないから、完全な遡登の記録としては、恐らく今回の小林・田辺両氏のもの最初と思われる。

因みに会津檜枝岐方面の岩魚釣りが袖沢へ入る道筋は、中門沢を下るか、三岩の肩を越えるのが普通のようなのである。

飯豊登山のこと

齊藤 健治

一昨年の八月末、外務省の太田君たちと東北の朝日連峯を縦走した。山に入つた途端、猛烈な風雨に遭つた。後で判つたことだが、それは丁度台風十七号が頭上を通つていたのだつた。

お陰で山では行き交う人も殆どなく、自分達だけの山のような気がして苦しかったが、また楽しかった。ところが寒江山あたりにやつて来た時、先方から我々同様雨に打たれて来る三人連れの一行に出遇つた。それが日高会長の一行だつたのである。

その後日高会長にお目にかかったとき、朝日での雨の出合いの話が出て、今度は一つ飯豊山に登つて、雨で悩まされた朝日の姿を遠く眺めようということになった。昨年の夏は私が九州へ行つたり、太田君はそれ以前にシンガポールへ去り、到々飯豊登山は実現しなかつた。

今夏はぜひということになり、日高会長と古沢肇、小泉満両君と私とで出かけることにした。

×

八月十一日の上野発の夜行は驚異的な混雑振りであつた。自分もその一人ながら、どうしてこうも日本には人間が多いのだらうと考えているうち、字義通り吞まれ、流されてホームへ出た。

十二日朝、小国駅へ着くと町役場の方々が、東芝電興KK山岳会の方々が迎えて下さる。役場で小憩し、今小国町長から観光地としての小国町の今後の発展について、その抱負をお聞きする。朝食をいただいて雨中をジープで長者原の藤田芳太郎氏まで送つていただく。藤田氏宅を辞して、めいめい荷物を担ぐ頃には雨も上り、青空こそ見えないが、山々の緑が眼に染みるようであつた。

今度我々と行を共にして下さる方々は東芝電興山岳会長の吉永亀

喜さん、同会の武田恒太郎、佐藤五郎のお二人、小国町役場の奥山茂樹さん、それに案内の藤田俊雄さん、一行九名で、夕霧に煙る温身平の東芝電興の堰堤小屋に着いたのは五時半であつた。

暗くならないうちにと愛竿を手に急いで川岸に下りると、果して八寸位と六寸位の二匹の岩魚を手にすることができた。

十三日、激しい雨で一日停滞。会長と武田さんは雨の中を飯豊温泉まで下つて行く。夕方はこの小屋自慢の電気風呂に入る。ラジオは台風十二号、十三号と矢継早に本土へ近づいていることを報ずる。

十四日朝、雨音、が止む。天候は恢復したらしい。七時半出発、石転び沢の雪渓が白く輝いて見える。旧道は檜花皮沢の徒渉を繰返したとのことだが、新道は白い花崗岩や碧水を眺めながら樹々の緑の下を行く。雪渓の入口で昼食、十文字鞍部が霧の中から浮かび上つて来る。天気は完全にわがものと氣をよくして雪渓を踏みしめて行く。草付きの鞍部への道は直登とぶよの攻撃に閉口たれる。

吉永さんの指示でキャンプ・サイドが定り、天幕が張られ、東芝電興山岳会発明？にかかる木炭使用折畳式ラデュウスが真赤に燃え

る頃には、眼下の石転び沢は紫色に黄昏がれ、見上げる北股岳は夕日を浴びて赤い。

十五日、快晴、十文字鞍部で、北股岳を越えて飯豊温泉に出て帰る、役場の奥山さんと案内の藤田さんに別れる。我々は相変らずの牛歩。足もとには薄雪草、右には大目岳、牛首を前衛に遙か日本海、左には朝日連峯をはじめ、鳥海、磐梯、吾妻が浮ぶ。天界のブロナード、脚が遅くなるのも無理はない。天狗の庭は天女の庭だ。晩夏の太陽が頭上で温く輝いている。今宵の幕営地は三国境。

十六日、今日で東芝電興の方々とお別れだ。西岳岳のケルンを背景に、竹田さんが団扇を舞扇の代りに、白足袋ならぬ銀靴でお別れの仕舞を舞う。日高会長から連日の御好意に對し謝辞が述べられる。

九時、三人の方々は一足先に出発、飯豊山から切歯尾根を通つて、小国へと帰る。我々はテントに荷物を置いて、空身で大目岳を往復して来る。今日も好天にて大目岳から北股、烏帽子、本山と手にとるように見える。御西岳に戻つて飯豊山へと向う。飯豊山頂に着いたのが四時、珍らしく霧が舞い寒くなる。ゆつくり山頂のケルンに石を積み、神社への下り

にかかる。切合小屋に着いたのは七時前、片隅に四人どうやら横になれる場所を作つて貰つて休む。最後の夜とて、食糧全部を出して名コック小泉君が腕を振る。

十七日、天候に幸いされた山ともお別れの日になつた。振返れば、大目岳から御西岳、御鏡の大雪山が光つて飯豊山へと続いている。三国小舎のシルエットが浮び上つてきたところで、新潟、亀田山岳会の方々にお会いする。仲間の一人が急病でお困りの御様子、ゆつくり休んでから下るようにおすゝめする。

川人に出て、一ノ木発最終のバスに連絡する荷物四輪車をつたが、ついに待ち呆け。意を決してさらに九キロ歩く。溪流沿いの景色のいい道だが、蛇の大群が、疲れた身体の回りに隙なく飛びまわり、さんざんな目に遇つた。一ノ木で汗を拭い、ハイヤーを山都町へと走らせ、六日にわたる飯豊の山旅を終つた。

還 曆 偶 感

石 黒 清 蔵
(会員番号六二二)

ある親しい山仲間の集りのあつたとき、お互いに話はずんで、何か言わねばならなくなつたが、日頃の口下手で、何も言えずに帰

途についてしまつた。しかし何か言いたかつたのは事実で、まとめるとこんなことであろうか。自分も年とつたから、いささか懐古的であるのは勘弁して下さい。

ところで、学生時代には何となしに登山をしたが、卒業して、結婚したら登山らしいこともしなくなつたという例が世間には多いようだが、私など年をとつても毎年「立山・剣」くらいは登つてゐる。なんといても山へ行くものは健康に恵まれていなければならぬ。そして当然のようだが、家庭が円満でなければならぬ。

壮年時代には夫婦の間に複雑な問題が生ずるのは誰しも経験することであるが、子供の一人も出来ると女房は夫の言うことにばかりかわつてもいられないと見えて、なんだかんだと争いが起きる。そんなとき私はきまつて山へ行つた。

その頃を顧みると、親しい友達、私を評してガムシヤラだとか、夫婦の間がうまくいっていないのではないかなどと私語いたものである。米と塩だけで何日も早月、片貝の谷を歩きつづけ、病氣を起して敗退したこともあるし、剣の西面に佐伯八郎とともに執念の鬼のように取組んだこともあつた。しかし、その間、家を出るとき

女房は、いつもいやな顔をしたことはなかつた。「好きなことなら何ほでもやりなされ、だが遭難だけはして下さるな。親も子もいるんですよ」と、私の好きなものを調え、装備、食糧に気を配つて、当時としては最上のものを用意して呉れてあつた。

これは今になつて考えると、遭難—今日類発の遭難と関係があるように思う。「好きな山登りで死んだのだから本人も満足であらう」などと言う前に、家族は家族なりの気の配りが必要で、持ち物ばかりでなく、どんな所へどんな条件で行くか、本人の日常と照し合せて考えてやるのが、女房にかぎらず親兄弟の心情というものではないか。本人の健康、出かけるときの微妙な心理状態は、友人よりも誰よりも家族の者が一番よく知つてゐるはずである。

×

一昨年夏、わが富山県に於て国体開催に当り、全県的盛上りを機会に、六十才を記念して旧友が集つたが、そのとき一言言い合せたように、人生一番の幸せは健康である。それには一家の円満が何より根本である、と結論した。それより一同女房も子供も打揃つて元氣よく、大日平で炊事をしたり、屋敷をしたり、雷鳥荘でお湯につ

かつたりした喜びは忘れ難い。

友人小川良平氏(会員、六十五才)は不幸今秋戦災で家族を失われたが、元気で、山へは以前に増して盛んに登つて居られるのは、山が人生にいかにも楽しみを与えてくれるものであるかを例証するもので心強い。

(三五・二・三)



図書紹介

カットは上田哲農氏

SELECTED INDEX of

Reports on HIMALAYA, TIBET, AND CENTRAL ASIA TO THE GEOGRAPHICAL JOURNAL VOL. I (1893) - VOL. 125 (1959) by Yoshimi YAKUSHI, Kyoto, June, 1960 (非売品)

会報二〇八号に神原達氏のNE-

PAL BIBLIOGRAPHYの書評

を書いたが、それに就いて同じジエネレーションの葉師義美氏が標記インデックスを完成した。若きヒマラヤ研究家とその労作を次々と完成していくのを見ることは本に頼もしいことである。

デオグラフィカル・ジャーナルについては今更言を弄する迄もないが、この有名な文庫も第一巻からの全巻揃いとなると滅多にお目にかゝれるものではない。偶々このインデックスの論者は、当時在学中だった立命館大学の図書館で、恐らく日本で唯一の全巻揃いと思われるこのジャーナルを発見して、すつかりとりこになつてしまつた。「私は一山もあることデオグラフィカル・ジャーナルを前にすつかり頭にきてしまつた」とつくづく述懐しているように、その驚きと喜びをもつてこの仕事が始まつたのである。

そして一九五九年の一月に取敢えず、ヒマラヤ、チベット、中央アジア関係の論者の興味を引いた一二点をピックアップしてプリントしたものを公けにした。

そして一九六〇年の六月に遂にこのインデックスが完成されたのである。内容は前回のものに、今回新たに精査したものを追加し、収録した点数も五二七点に達して

いる。今回はこれを発行年代順に羅列したほか著者別の索引もまとめられている。

このジャーナルのジエネラル・インデックスは一二〇巻(一九五四年)迄十年毎に六冊に分けて刊行されてはいるが、このインデックスの様に我々にとつて最も興味ある地域のもを年代順に収録したものも、便利なものである。ヒマラヤを研究するものにとつて比較的とりつき難いジャーナルだけに今後多くの人に利用され貴重な資料となることだろう。

特に巻末に附録として採録されている我が国の各大学図書館に於けるデオグラフィカル・ジャーナルの所在一覧は参考になる点が多いと思われる。

最後に今後ともこの種の研究がより盛んになされることを念じて止まない。(松田雄一)

CONTENTS AND INDEX

to the HIMALAYAN JOURNAL. Vol. I (1929) - Vol. XXI (1958) by Eizo SUWATA and Yoshimi Yakushi Kyoto, August, 1960 (二〇〇部限定出版、非売品)

デオグラフィカル・ジャーナル

のインデックスが上梓された時に、葉師氏は次はヒマラン・ジャーナルのインデックスを作りたいと洩していたが、そのインデックスが、会員諏訪多榮蔵氏との共同によつて、極めて短期間の間に作りあげられたことは喜びにたえない。

ヒマラン・ジャーナルは他のジャーナルに較べて比較的历史が浅く、現在のところ全部で二一冊であり比較的少ないとはいへ、全内容がヒマラヤに関するものであり、内容は実に豊富である。その上僅か二一冊とはいへ、全巻揃いとなると日本には数組しかなく、その意味からもこのインデックスは利用価値が極めて高いものと考えられる。

内容は第一部が各巻毎の詳細な内容一覧。第二部として著者別索引、並びに地域別分類索引があり、ヒマラヤ全般、中央アジア、ヒンズクシ、カラコルム、ナンガ・パルバット、パンジャブ・ヒマラヤ、ガルワル・ヒマラヤ、ネパール・ヒマラヤ、エヴェレスト、カンチエンジュンガ、シッキム・ヒマラヤ、アッサム・ヒマラヤ、其の他の地域と一四の地域に分類された索引がある。

この内容を眺めているだけでも結構愉しくなるもので、ヒマラヤ

ン・ジャーナルの全巻をもつてない私も、これによつて全巻が揃った様な気になるから不思議なものである。(松田雄一)

Himalaya-Chronik 1958
von G.O. Dyhrenfurth, Bern,
Druck Stampfli & Cie, 1959,
p. 17, Photo 8.

ヒマラヤ登山記録の權威 G・O・ディレンフルト博士がスイス山岳会機関紙 *Die Alpen* に *Himalaya-Chronik* と題して前年度のヒマラヤ登山記録をまとめていることは年中行事の一つとなっているが、この度当会宛スイス山岳会から、この一九五七年版及び五八年版の別刷が届いたので簡単に紹介しておく。

今回の記録集には主として一九五八年中に行われた記録二二が収録されているが、比較的早い時期にこれだけの記録を集め、しかも文献名まであげているのには感心させられる。日本山岳会の山岳にもこの程度のものをこの位早い時期にまとめられないものだろうか。日本からだけでもヒマラヤに一年の間に七隊も入る様になつたのだから……。参考迄に一九五八年版に収録されている記録をあげてみると左記の通り

1、ブータン……中尾氏
2、一九五七年秋のジャヌー偵察(フランス隊)
3、スリッパジョンソンの雪男隊

4、グレゴリーのアマダブラム
5、インドのチョーオユー
6、深田隊のジュガル・ヒマール行

7、ヒマルチュリ先遣隊
8、スイスのダウラギリ
9、インドのガルワルの *Ming-thuni*

10、*H. Chronik 1956* の 14 のスピッティの項の追加

11、クル・スピティ

12、チャムバ・ラフル

13、英国婦人隊オーバー・ランド・遠征隊

14、シプトンによるイムベリアル大学のカラコルム

15、アメリカ隊ヒドン・ピーク

16、桑原隊チヨゴリザ

17、イタリー隊ガッシャールム IV

18、一九五七年マッシャールム

19、オーストリー隊ハラモシユ

20、英国隊ミナビン

21、バンクス隊ラカボシ

22、オックスフォードチトラ

ル・遠征

そして最後に追補としてヒマラ

ヤン・ジャーナル二十一巻にのっている上記遠征記録の索引と、一九五九年の各隊の行動概要を速報している。(松田雄一)

ネパールの高地にて

ノーマン・ハーディー著
神原達、牧野登 共訳

ハーディーの名著 *In Highest Nepal* の邦訳である。原書については会報一九四号に成瀬氏がシェールバと *In Highest Nepal* と題して詳しい書評をかかれていますので御承知の方も多いと思う。

山の本には、大して面白くもないものが邦訳されている反面、名著といわれ、こういう本は是非誰か邦訳すべきであるといわれ乍ら世に出ないものが多い。この種の

本の中にはヒマラヤ文献の古典中の古典ともいわれるジョセフ・フーカーの有名な *Himalayan Journals 2 Vols.*, London, 1854 ス

マイスの *The Kanchen Junga Adventure*, London, 1930 シプトンの *Upon that Mountain*, London, 1943 ティルマンの *Nepal Himalaya*, London, 1962 などあ

げられるが、それらと共にこの *In Highest Nepal* も邦訳の刊行が心待ちされていたもの一つであつた。この問題に敢然として挑戦していかれた。神原、牧野両君

のファイトには敬意を表するばかりである。その間著者のハーディー氏は、「日本語版への難かしい登山に、勇敢に挑戦する学生を宜しく頼む」と日本山岳会へ手紙をよこされたこともあつたし、「アジアの道は時間がかかる」とユーモラスな表現をつかつて訳者を激励されたこともあつたらしい。シェールバの人間性についてはこれ迄いくたのヒマラヤ登山報告書にみられ、私達も実際にシェールバと山行をともにした経験があるので、

彼等の人のよさは充分に知っているつもりではあるが、本書の著者程ヒマラヤの自然と、その山麓のシェールバ族に対し、愛情をもつて

かかれたものをみたことがない。この世の中にシェールバの様な人間が存在していることが不思議に思えてならない程である。ヒマラヤ登山からシェールバをとつたら何が残るかという問はよく私達の仲間

の間で話題となる。「八千米の山がそこにあるからヒマラヤにいくというのではなく、シェールバと楽しい旅ができるからだ」という答

が、もつとも真実性がある様に思えてならないのである。そしてこの答を、ヒマラヤにいつたことのない第三者が理解するのは、本書はもつとも適しているといえる。その意味からも、広く山を愛

する方々に本書の一読をおすすめする次第である。

この本の著者ハーディー氏は、楽しかったシェールバの旅を想い出して、今秋再びマカルーの山麓へでかけることになつた。そして

訳者の一人神原君もシェールバの村を尋ねてソロ・クーンパを尋ねようとしている。共通の気持の著者と訳者とのコンビネーションがどれ程びつたりと一致していたかは、こうしたその後の行動をみて

もわかる様な気がする。訳文の中にも、こうした訳者の共感や熱意がしばしばみられてうれしい。

(松田雄一)
B 6 版、二四二頁、一九六〇年六月、朋文堂発行 二八〇円

The Canadian Alpine Journal

Vol. XLII 1959, Vol. XLIII 1960

戦後しばらくの間中断されていたカナダ山岳会 (The Alpine Club of Canada, Headquarters: Banff, Alberta) との連絡がとれ、この度グリーン表紙のアルパイン・ジャーナルと同一装釘の標記ジャーナル一九五九年版、一九六〇年版の二冊が久しぶりに届いたので簡単に紹介する。

一九五九年版の方は一月二六日にマラント・フェアウエザーのファースト・カナディアン・アッセントに成功した記録を一九五八年を祝福して巻頭にのせている。他に外しくカナダ人による初登としてC・シープがウオディントン峰を、S・スピニコバがアルバータ峰を書いている。アルバータの方は横隊、オバーリン隊につく第三登である。A・W・ドップによる「ヒマラヤの高所における高度馴化について」(Acclimatisation at High altitude in the Himalaya by A.W. Duff)という題名の論文は、特筆すべきものであるが彼の結論は控え目である。

一九六〇年版の方は、巻頭三十頁を費してカール・リッカーによる詳細に亘るマウント・ローガン東峰第二登の記録がある。これはカナダ山岳会のハンス・ゲモザーが一九五八年の初夏に成功したマウント・ブラックバーンの計画に次いでオール・カナディアン・エクスペディションとしてカナダ国内の最高峰マウント・ローガンを計画したもので実にすつきりした登攀記録である。

他にマウント・ラシーの記録、英領コロンビアのバットル・レンジの記録等を収録している。

(松田雄一)

FOUNDED 1905



日本山岳会
JAPANESE
ALPINE CLUB

カットは 佐藤久一明氏

会務報告

九月理事会 一日・ルーム

▽出席者 松方副会長、理事折井、太田、木下、徳久、高橋、古沢、川上、加藤、山崎、評議員成瀬、永井(大分)、委任出席、渡辺、浜野、金坂、小原

▽議事と報告

①高校生登山技術講習会の報告

(川上及び高橋理事)

②大分支部設立の件、報告

(永井設立発起人代表)

・会員数20名(大分、別府が中心)

・支部長、永井清一

・副支部長、野口秋人

③木暮翁記念碑改築について

(折井常務理事)

・経費20万円、山梨県で10万円補助、日本山岳会より10万円、うち東京支部で3万円。建設地、金

・山麓、金山。10月完成予定。

④アメリカ人ボーデン氏(会員)

による山の美化運動について報告

(松方副会長)

・山の美化についての論文を全国より募集する。山岳会はこれを支援する。

⑤林野庁で小屋建設の件

(折井常務理事)

・場所、大雪山、東北朝日、槍平等、とりあえず谷川岳、毛渡沢乗越、飯豊の与四郎池、南アルプスの熊の平を推せんした。

⑥山岳全集の件(山崎常務理事)

・明文堂、創元社の企画について山岳会として協力はあるが、監修はできない。編集委員については出版社が個人的に依頼する。

⑦小集会のあり方について

(高橋理事)

十月理事・評議員会 六日・ルーム

▽出席者 日高会長、理事折井、金坂、渡辺、浜野、太田、山崎、日下田、川上、田村、高橋、徳久、古沢、評議員入沢、神谷、深田、三井山梨支部長、星野日本岳連理事、田島(阪大OB)

▽議事と報告

①登山用テント規格公認申請の件

(全国帆布製品工業会代表)

・今後の研究課題とする。本会における研究担当者として高橋理事

②海外遠征歓迎会について

(高橋理事)

・南極隊、アビー隊、アラスカ隊、

ヒマルチュリ隊等合同で行う。

③小集会について (高橋理事)

・アビ、ヒマルチュリ、10月24日、大学山岳部員、および若いOB等を中心に冬山の心構について

11月中旬予定

・年次晩餐会、12月初旬の予定

④第2回登山技術指導者講習会について

(日下田理事)

・場所、西穂高(前年と同じ)

・期日、3月19日~25日

・CLとして三田副会長を予定

⑤登山指導者講習会について

(星野日本岳連理事)

・文部省・日本山岳協会共催

・場所、富士山(11月19日~22日)

・目的各都道府県指導者に対する啓蒙。

・本講習に対する山岳協会側の責任は一切日本岳連がもつ。

・講師、山岳会側から若干名出してほしい。承認。

⑥木暮理太郎翁前祭について

(三井山梨支部長)

⑦大韓民国慶化学学生山岳連盟訪日希望について

(折井理事)

⑧高校生登山技術講習会について

(日下田理事)

・今後も継続的に行う予定

・期日、八月初旬

・場所、立山周辺

⑨阪大山岳部P29遠征について

(OB田島汎氏)

・外貨申込と計画の説明あり

⑩日本山岳会の遠征計画について

(金坂理事)

・ヒマラヤ委員会で調査検討中

⑪一橋大山岳部、並に関西学院大山岳部のアンデス遠征について、

各々計画の説明があつた。

小集会記録

第二〇八回 九月十七日(土)

講演 アラスカ、マッキンレー

登山

講師 早大 吉阪隆正氏

明大 交野武一氏

参会者 四十四名

小集会講演要旨

九月十七日

アラスカ・

マッキンレー登山

その一・明大パーティ

講師 交野武一氏

私たち、明治大学山岳部のマッキンレー登山は、当初の純登山隊という考えから離れて、最終的にはアラスカ地域総合学術調査団の中の山岳班として、地理学、氷河学上の研究を含んだ形の登山という、まことにややこしい山登りとなつてしまつた。

これは明治大学内の諸々の事情、資金調達、外貨事情等が原因

となつたのであるが、とにかく9人の登山隊員に4名の報導隊員という形はいかにも不自然な隊組織を感じないわけにはゆかない。

マッキンレー登山は北極圏に近く、また太平洋北部の気象の変化を激しく受けるアラスカ州内に於けるその位置、そして独立峯であるということは、非常な寒さと激しく変化する気象条件に対応する準備をしなければならぬ。私たち日本人にとつて未知の山であるだけに準備は慎重を期した。早稲田大学山岳部でも丁度同じ頃にマッキンレー登山を計画していたときであつたので、資料その他の情報を交換し、出来得れば早、明合同パーティとしてやつてみたいと考えていた。しかし資金の出所、計画の進捗状態などから実際には別個の行動をとつてアラスカにおもむいた。

アラスカの山は、日本からは御承知の通り初めての試みであり、五十余の山岳、學術両班の荷物がシャトルの税関で引つかかつてしまつた。幸い現地領事館の御援助で、なんとか無税で通関することができたが、一時はこの荷物が登山の成否を左右するものであるだけに、最大のピンチに追い込まれてしまつた。アラスカへ入ることについては勿論、私たちの不勉強

もあつたが、地理的にはアラスカが日本から近いところにあるが意外になにも知られていなかったのである。

マッキンレー登山の最大の特質と言へば、この山はアメリカの国立公園の区域内に含まれており、国立公園の管理事務所への入山許可を得なければならぬ。しかも、マッキンレー周辺にはポーターは居らず、道も無いので、入山から荷物の輸送のすべてを頼らなければならぬということである。

私たちはベースキャンプへ飛行機で着陸して登頂の目的を果たし、41日間、山中に滞在した。登山行動については、後ほどカラーズライドで説明するが、山に入つてまず第一にスケールの大きさに戸惑つた。心配していた寒気は、第1キャンプでの平均気温はマイナス22度で、きびしいものではあつたが、空気が非常に乾燥しており、体感温度は寒暖計が示す目盛ほどには感じなかつた。

私たちのメンバーは、はじめて海外登山をするものばかりであつたので、全てが新しい経験の連続であつた。特に高度の影響による力の低下を来さぬために、BC及び、第1キャンプに長期間滞在して、高度馴化につとめた。そのため六一九一mという高さが、それ

ほどのものでないとしても、著るしい高山病にかかつた者は、ほとんど居なかつた。急ピッチで経験にまかせて登つてきたアメリカの隊に、事故が続出したのと好対照であると思う。

無線器については、出発当時は、適当な機器が日本にはなかつたので、アンカレデにおいてアラスカ電話会社の好意で、ゼネラルエレクトリック製のモトローラ型の無線電話機を借用した。トランジスタ使用のこの無線器は寒さに弱く、私たちの使用上の拙さもあるが、ほとんど使用できなかったが、飛行機を使う登山の場合特に無線器の重要さを痛感したのである。

その二 早大パーティ

講師 吉阪隆正氏

私たちの隊は、明大隊の後をそのままだつて行つたので、行動上も、また入山までの事情についても非常に楽であつた。私たちに、プリンス自動車によるアラスカ・カナダ・アメリカ旅行も、今回の隊の目的の一つであつた。一台のプリンス自動車で、登山用のすべての荷物を運搬しなければならぬのと、資金面のこともあるが、切りつめた計画となり、私たちは徹底的に軽装備を採用したのである。

私たちの第2キャンプ（明大隊

の第3キャンプ）付近までは、明大の踏あとをたどり、これから上は明大がとつたウェストバットレスのルートを探らず、主峯の南壁の稜線上に登行の可能性を見つけた。

南壁稜での苦闘、そして途中でビバークをしなければならなかつたので、隊員に軽度の高山病や凍傷にかかる者が出た。またサポート隊との連絡不備もあつて、ついに頂上に達することができなかつた。頂上への再度のアタックをすべきかどうか、皆で議論もしたが、隊員の健康状態もあり良くなかつたので、休養のために、一応ベースキャンプに下つた。

その後、天候が悪化し引きつづいてアメリカ隊のアシデントのために、登頂は断念した。以上

▽

両氏の講演のあと、それぞれカラーズライドによつて、各隊の行動の説明があつた。アラスカの山は氷河が雄大で、白一色の中に原色のテントやウインドヤッケ、ロープなどの配色が美しく、アラスカならではの素晴らしきであつた。（司会、高橋 進）

東京支部報告

9月21日（水）会員集会

△南極の話と映画

講師 村山雅美氏
参会者 30名

▼婦人部便り

飯豊山と雲の平と

一三四、五年の夏の旅

坂倉登喜子

三十三年の夏、栗駒山へ登つて、みちのくの山を知つてから、西吾妻へ秋と冬に二回。そうして三十四年夏、薄雪草を訪ねて飯豊山へと、女子ばかり十二名で八月一日上野駅を出発、二日大日杉登山口から切合小屋へ登つて一泊。三日は御西岳への稜線を、薄雪草とたかねまつし草の群落を分けて歩き、雪溪の中に冷したシロップに夏山の快味を友と分けあつた。雪解け水にうるおつて咲くナンキンコザクラの群落で、原は一面に紫紅色のカーペットを敷いたようだった。

帰りは西岳から飯豊本峯へ登つて夕映えの山脈を仰ぎ、その夜は山頂小屋に一夜を送つた。翌早朝、山頂で雲海を見下ろし、ダイゲラ尾根の凄い上下を漸くの思いで、バス発着所にたどりつき、一行は米沢から帰り、私だけ一人旅で、北陸線を糸魚川で大糸南線に乗り

継ぎ、大町から葛温泉に着いた。

×

その夜、東京と名古屋から来た女性パーティと合流して、翌日湯俣山荘着、夜はボーデン氏(会員)を交えて、低音の美しい歌を聞いたり、十二年前に三俣で熊を捕った林平さんに思い出話を聞いたりした。

もう幾度目かの伊藤新道の登りは、途中要領よく休んでゆつくり三俣小屋に着いた。

雨のために三百名近い人が集中してごつた返していたが、私たちは特別室に歓迎されて伊藤さんに久しぶりに対面し、夜はなつかしいギターの響を聞くことができた。

私たちは、今夏の目標、黒部源流の沢を探ぐる第二回目として岩苔小谷へと向い、晴間を見て源流の鞍部からガレ場を下り、水晶池への道に出た。よくぞこの名をつけたと思われるほどに美しい苔のクッションに露が宿つて輝くさまは、思わず見とれるほどの美しさ、附近のお花畑もまだ人に踏まれたことのない清新さに、私たちの喜びは大きかった。

大東鉱山から立岩までと思つていた望みは、天候に阻まれて果し得なかつたが、また来年もこの谷へと、未知の沢へのあこがれをよ

り深めて、双六小屋から小池新道を槍見へと下つて帰つた。

(三四、八)

▽

昨年につづいて、今年の雲の平の計画は、祖父沢源頭にてテントを設営し、岩苔小谷から大東鉱山跡に一泊して源流を歩く班と周辺を歩く班とに分けて、今年も伊藤新道から三俣連華小屋に入つたが、折悪しく11号台風から引続いて連続台風に近い、空しく双六から小池新道をまたも槍見へと下ることになつてしまつた。

しかし今年は十二名のメンバーで小屋生活を一週間もしたので、来年のテントでは山のお料理も美味しいものができると、来シーズンの岩苔小谷と高天ヶ原の生活を今から夢見ているような次第である。

(三五、八)



カッターは山下一夫氏

◇ 寄 贈 図 書 (和 書) ◇ 35 年 4 月 ~ 9 月

中大スポーツ 1960年
兵岳連報 3号
山 想
群 峯
八甲田遭難記
地理調査所時報 23・24号
空中写真撮影記録 4・5号
穂高の岩場(2)
第一次越冬隊そり犬の管理
部報 3・4号
滝 谷

兵庫岳連
関西大学山岳部
専修大学山岳部
安達 憲
朋 文 堂
菊 池 徹
東北大山岳部
東大スキー山岳部

部 報
ネパールの高地にて
風雪のビバーク
時 報
唄 松
標高8840メートル
休協時報 92号
日本山脈縦走
会 報
兵庫の自然
針葉樹
吾妻連峰

東京理科大学山岳部
牧 野 登
朋 文 堂
神戸大山岳部
東京教育大山岳部
石 一 郎
朋 文 堂
東京都立大山岳部
江越千代子
一橋大山岳部
登坂 信雄

NAG 8号
台湾山嶽
溪流 35・36・37号
OLYMPIA
都庁山岳部報 No. 157
山と書物 正・続
シルクロードを行く
愛媛岳連報
山の気象と遭難
報告書
アレート(8)
事故報告

長岡山岳会
台湾省体育協会山岳会
気 象 庁
日本体育協会
築地書館
朋 文 堂
愛媛県岳連
朋 文 堂
名寄山岳会
順天堂医大山岳部
千葉大医学部山岳部

35 年 4 月 1 日より 9 月 30 日迄 国内定期的刊行雑誌 (受入)

書 名	発 行 所	刊 番 号	会 報
岳 人	東京中部日本新聞社	4月号~10	OMCレポート 奥多摩山岳会
ア ル プ	創 文 社	4月号~10	明 峯 山 岳 会 明 峯 山 岳 会
気 象	気 象 協 会	4月号~10	山 毛 樺 林 広 島 山 の 会
山 と 溪 谷	山 と 溪 谷 社	4月号~10	白 峰 関 西 山 岳 会
国 立 公 園	国 立 公 園 協 会	4月号~9	
山 と 高 原	朋 文 堂	4月号~10	
登 山	朋 文 堂	5月号……以後ナシ	

(係 徳久珠朗・大橋普)

北大アラスカ氷河調査隊帰国

私共北海道大学アラスカ氷河調査隊は、北大及び北米北極研究所の協力により、去る五月上旬日本を出発し、アラスカのメンデンホール氷河に入り二ヶ月余に亘つて調査研究を行つておりましたが、七月下旬に仕事を終え、今般一同元気に帰国致しました。

昭和三十五年九月

隊長 東 晃

副隊長 橋本誠二

ヒマラヤ登山学校寄贈装備

一九五九年春、メーカー各位の御協力により当会がとりまとめて在印度、ダージリンのヒマラヤ登山学校に寄贈した装備一式は、現地において多大の反響をあつてゐるが、この度シンガポールのマラヤ大学教授のブローディ博士(Dr. E.J. Brody)から次の様な照会をうけた。

「最近、印度ダージリンにあるヒマラヤ登山学校(Himalayan Mountaineering Institute)を訪ねた時、私は日本製の素晴らしい登山装備をみる機会をえました。就いては日本からこれらと同様なタイプの装備を購入し度く存じますので代表的メーカーのカタログをとり寄せて戴ければ幸いです。右御願まで、敬具」

ヒマラヤ旅信

ネパール文献目録をめぐって

神原 達

爽やかな気候の夏の軽井沢を思わせるカトマンズの飛行場に降り立つたのは四月三十日だった。三年来文通を続けてきたネパール人ピナヤ君と、ニューヨークの自然科学博物館の二世の民族学者フエルディナンド・岡田氏に迎えられ、私は初めてこの土地を見た。到着早々、私のまとめた「ネパール文献目録」や、またニューヨークと東京の両所に於けるネパールに関する古書の相場など、話は文献のことから始まった。

過去五年間に集め得たネパールに関する欧文文献の目録を昨年末私は暫定版としてタイプ印刷でまとめた。分類などかなりの改良を要する点が多いのだが、幸いにもその目録は各国で好評だった。

×

カトマンズにて私はいま一冊のネパール文献目録を入手した。それはオレゴン大学の教育学教授で、ネパールの教育指導のため六年間当地に滞在したウッド氏のまとめた目録である。彼の目録はネパールにて刊行された英文資料が十分に集録してある。但しネパールの資料の大半をしめる登山関係の文献は彼の目録には含まれてな

く、従つて文献集録数の上からは私の方が秀れていると自負できる。

×

いま私はとぼしい資金をはたいてネパール刊行の各種資料を買いあさっている。一日も早くウッド氏の目録に追いつきたいものだ。またカルカッタでは借金をしてもヒマラヤ関係の古典を求めたく本屋に注文をしてあるが、アメリカ人が最近ヒマラヤ地域の研究に熱を入れたので相場が上つたとの話である。

ところで日本に於けるこの地域への関心と研究は未だ低調である。日本のアジア研究は戦争中特に隆盛をきわめ、当時刊行された立派な研究所は今日でも価値を失わぬものが多い。しかしヒマラヤ地域に関しては、白紙の状態であつた。昔の勝れた研究機関、例えば満鉄調査室とか東亜研究所の流れをくむ現在日本一のさるアジア研究の半官半民の研究所でも、ネパールまでは手がまわらないという悲むべき話を聞いた。(略)

一日私は岡田氏をUSOM(アメリカ対外援助機関)の宿舎に訪問した。ポカラを中心とした西ネパールの旅行の話など、そして同氏の民族学の論文のことに及ぶと、アメリカ政府の職員としてUSOMには全て政府のどこかに行つてしまい、学界には発表できないのだと云われた。夫人がマラリヤで重

態の同氏はすぐく淋しそうな顔をされた。しかし全ゆる日常生活に不便な当地でも、このアメリカ村だけは別世界で生活だけは不自由しないとのことだった。国連のWHO派遣の正垣医博と二人だけの日本人は、アメリカ村の生活には溜池が出た。

いま例えば私のもとに、私の僅かなネパール研究(主として文献学的な)をどこかのファンにのせないかとの要請があつたとしたら、私は敢然と拒むるだらうか。私はそれほどの愛国主義者でもないが、やはりこのような環境で一人考えてみると、日本ということが、第一に浮び、日本人であるという悟らざるにはいられない。

インド便り

神原 達

八月二十六日、住みなれたカトマンズから、インド航空の飛行機で一路カルカッタ着。すぐに婦人隊のお手伝をさせてもらいました。カルカッタでN・ハーディー、ヒラリー等と逢つた時は一寸劇的でした。成瀬氏からのお手紙を、レディイス隊からいたゞき、その中に「一生の中でそう何回もないチャンスだから充分に楽しませる様に」とのことでしたが、本当にそう思いました。レディイス隊の方々(細川隊長、原さん)も一緒に三十分間だけ会う約束をし、車でとんでいきました。

ヒラリーは写真をつくりの犬男で少し太つた感じでした。ハーディーも写真をつくりでした。レディイス隊を囲み、五、六人の居合はせた隊員と共に日本、ニュージランド山岳交歓会を開きました。松方さんのこと。ハーディー氏の来日の件、早稲田の女性のニュージランド行き、お互の計画等話題はつきませんでした。雪男はいると思うかの質問には、我々ひげつら男の前には姿をださないだらうがレディイス隊の前にはでるかもしれないといった調子、和気あいあいたる歓談であつた間に、三十分間たち、記念写真をとつてすぐに帰りました。

ハーディー氏は日本行きの件を大変心配し、その後どうなつていくのか具体的に細かく知りたいとのことでした。

(編者注:ハーディー氏から日本山岳会宛にマカールの帰路十二月上旬日本に立ち寄りたい旨の申込に接している。)

ソククンブにはハーディー氏を訪ね、是非ともシェルパの村で再会したいと思つています。ソククンブには政治問題があり、許可は難しいようです。

×

さて私の仕事であるネパール文献目録の改訂版のタイプも、カイザ氏の蔵書など全部調べてまとめました。これからニューデリーのSapre Houseの国際問題研究所にて一週間勉強してきます。

ダージリンにて一日涼しい気候の下で過ごし暖炉のもとでビールを飲んでました。少しは疲れがとれるかと楽しみにしていましたが、テンジンにあつてシェルパ同志の内輪もめの話などきかされ、少々がつかりました。それでも雨のダージリンのウインドメア・ホテルの暖炉のもとで日本の山小屋のことを思いました。そして日本の山のこと、家のことなど久しぶりに思ひだしたりしました。早いものでもうもう日本を出て半年もたつてしまいました。日高会長はじめ、会員の皆様に宜しくお伝え下さい。

(九月八日付、カルカッタにて、松田雄一あて、編者抄録)

マナリにて

奥川 雪江
(デオ・チバ隊)

おかわりなくお越しのことと存じます。もう東京は秋風が立ちはじめた頃でしょうか、私どももマナリに滞在して一週間になりました。暑さからこの涼しいクルーの谷に来て、ますます元気になつて居ります。

九月九日、ロータン峠へギャルツェンと共に全員登りました。マナリと峠とはいつも三田さんのことを思い出すにはいられませんが、ペノン氏はマナリも昔に比べると家が沢山建つてしまつた仰有います。

一月ほど前、日本からの写真を

受取られたそうです。お元気でク
ーリーの手配やら何かと私どもの
面倒をみて下さい。息子さん
のジンジャー君も、三田さんの来
られた頃はこんなに小さかったと
ご自分の息子さんを指さされまし
た。

峠へはララという所までジープ
で参ります。マナリから約一時間
でした。八時にララを出て峠につ
いたのが二時近く、馬や羊や山羊
の群が鈴を鳴らしてのどかに越え
て来ます。ピアスキもすでに左
手にそびえていました。はじめて
のヒマラヤとの対面に感激でし
た。

緑濃いクルーの谷に比して、チ
ヤンドラ川へは、たゞ石のゴロゴ
ロした斜面が落ちているばかりで
す。ポストモンズン期より雪は
大分少ない感じがいたしました。

昨日はマナリに滞在中のヒマラ
ヤンクラブのホッツ氏(Mr. Hots)
を山荘にお訪ねいたしました。ピ
アス川の左岸の斜面の素晴らしい
眺めの場所です。丁度、田口二郎
氏の奥さまも一緒に、数々の遠
征の写真や、昔のマナリのお話な
どで楽しく過ごしました。

いよいよ明日、キャラバンに入
ります。このクーリーは絶対に
三〇K以上背負わないそうで、八
十人位になつてしまふかもしれま
せん。

シェルパは、ギャルツェンのほ
か、ダワ・トンデニツブ

ラクパ・ゲルブ

パサン・ダワ

ラクパ・ツェリン(コック)

で、ラダッキを四人、高所用ポ
ーターに使うつもりです。それで
はまた、御健康をお祈りいたしま
す。

(九月十一日 三田幸夫あて)

ベース・キャンプより

細川沙多子

(デオ・チバ隆)

マナリを一〇〇名のキャラバン
で出発するはずのところ、クルー
地方のお祭と一緒にたつてポー
ターが集らず、いかにベノン氏親子
が車でかけずりまわつてくれても
二〇人位しか集りませんでした。
マナリよりデビボクリへはどうし
ても行けぬというのです。そこで
仕方なくジャガッリ谷へ入り、と
も角デオ・チバ隆を最初に登頂す
ることに変更しました。

9月12日、馬19頭、ポーター25
人、ローカル・ポーター(ラダッ
キー)4人と、シェルパ5人、隊
員8人(ニマ・ラモちゃんとかル
カッタの中村光子さんをBCまで
のお約束でお連れしました。)で出
発、キャラバン五日間で、標高四、
〇五〇mのセリへBCを設営いた
しました。着いて二、三日は頭が
いたくて困りましたが、もう治り
ました。二日の休養の後、正面の
雪をいただいた五、六〇〇mの無
名峰の鞍部の急斜面の草付を登
り越して、氷河の末端、四、四〇
〇mにCIを設営し、シェルパ4

人、隊員4人と交替で高所順応を
いたしております。

C2も本日建設を終りましたの
で、一応全員BCに下りて休養し
た後、デオ・チバをアタックする
予定です。C2よりのデオ・チバ
は、前後左右とも氷河で、さすがに
ヒマラヤの様相を呈しています。
C3は頂上よりつづく稜線に建
設する予定ですが、乗り切るまで
苦勞すると思います。

ガルツェンの適切な助言と、シ
エルパやローカル・ポーターに対
するリーダー、シツプは私たち
とつてどれほどプラスになるもの
があるのか、まことに心強い
がざりです。娘のニマ、ラモちゃん
も登りは私たちより速いくらい
で、氷河の上でも、アンザイレ
ンしてもパパがよく教えています。

今日はBCに入つて、はじめて
降雪に見舞われましたが、時間は
まだまだありますので、無理をせ
ず、全員で頑張りたいと思つてお
ります。どうぞ会の皆様によろし
くお伝え下さい。

(九月二十五日、松田雄一あて)

アビ峰登頂

平林克敏

(同志社大)

5月10日、朝6時、ガルツェン
と二人でC4を出発し、昨日の登
高点(イタリ隊ローゼンクルツ
博士の引返しした地点、約四、八〇
〇m)まで三時間で登りました。
ガルツェンのピッチにはどうして

もつてゆけぬため、トップを交
替して自分のペースで歩きまし
た。頂上に着いたのは11時40分、
素晴らしい頂上でした。

頂上はアビの写真で見るあの
プラトウが続いているのではなく、
殆んど垂直に切立っており、
チャムリヤの南面から吹き上げる
風のため、北面に大きな雪庇と
なり、それが青氷となつた状態
でした。はじめて、これを見たとき
頂上への乗越は不可能ではない
かと思つたほどでした。しかし主
峰と西峰とのコルの近くから、乗
越すことができた。ガルツェ
ンに下でつかり確保してもらつ
て、ゆつくり乗出よう主峰の
雪庇に上つたのですが、二〇cmも
出るか出ないうちに、すぐに垂直
なチャムリヤの谷の壁となつて
いました。イタリ隊のバレンギー
がもしここまで登つていたら
ら、雪の状態が悪くて、一人で乗
越すことができなかったか、稜線
へ出たときに、風と雪のためにチ
ャムリヤ側へ落ちたのではない
かと思われました。ガルツェンも同
じことを言っていました。

カラス、ガルワルの山々、ナ
ンパ、ロカアビと、それは素晴ら
しい眺めでした。イタリ隊をし
のんでもつてきたイタリ隊と、
日本の国旗とをかがめました。
ガルツェンの喜びはまたひとし
おび、この遠征のすべてに感謝し
ました。

(5月12日、CIIにて、松田雄一
あて、編者抄録)

京大隊ノシャック

初登頂に成功

京都大学学士山岳会派遣のパ
ール高原学術調査遠征隊の酒戸
二郎隊長からの連絡によると、
アガニスタン領パミールのハ
ワニ深谷に入りこみ、生物分布、生物
区系、地質構造などを調査中の同
隊は、その途中ヒンズークシ山脈
中の雄峰でアフガニスタンの最高
峰であるノシャック峰(Noshag
七、四五〇メートル)の登頂を試
み八月十七日、酒井敏明、岩坪五
郎両隊員により初登頂に成功、九
月十七日全員無事カブールに帰着
した。同隊は会報二〇八号に既報
の通り六名の隊員で構成され、十
月の下旬に帰国の予定である。

(松田雄一)

雪男印度北部で発見?

ヒンドスタン・サマシャル通
信が八月二十六日伝えたところ
によると、インド北部ミラザールの
警察は洪水の流れの中から人間に
似たサルのような巨大な動物をつ
かまえた。

背丈が二・一米もあるこの動
物は、黒く長い毛で覆われており
数匹のサルと共に木の幹の上に乗
つて洪水の中を流れてきた。なに
か話しているが、その声は理解出
来ず、サルのなき声に似ていた。

一緒につかまつたサルも同地方
にいるサルとは違い、これは雪男
かどうか問題になつてゐる。

◇誤謬脱落がありましたらどうぞ
お知らせ下さい。

◇会員カード提出に御協力下さ
い。(10月1日付)で記入をお願
いしましたカードをまだお出し
になっていない方は至急お送り
下さい。

◇動 静

日高会長は10月22日から約一ヶ
月の予定で、外務省の委嘱により
電源開発調査のためネパール国へ
出張した。

山の遭難事故統計表について

今夏、日本山岳協会では、全国的に登山安全運動を行ったが、その報告を兼ねた打合会が、9月19日、新宿御苑集会所で開かれた。本会からは日高会長（同協会副会長）が出席した。

本統計表は、当日警察庁から提示されたもので、本年夏の登山者数は、北ア山系約30万、谷川岳約4万ほどで、遭難者数（二月～八月）一六九件（死者六七、行方不明一、負傷者一〇九）。事故者の年齢別を見れば大部分は、一〇～二〇代の若い人である。例えば本年奥多摩でも四名の遭難があり、何れも高校生であった。これらのことは今後の運動目標（技術指導を含めた）の在り方を示唆するものと考えられる。

なお今日の主な話題は次の通りであった。

- 一、一般登山者への注意、特に高校生への対策（日高氏より本会の夏期講習の話をする）
- 一、指導者講習の必要（岳連に於て計画がある由）
- 一、山小屋主人及び雇人（アルパイト）の態度（登山者に自重をすゝめる態度がほしい）
- 一、登山事故に関する刑事事項。

昭和36年度体協国際スポーツ行事用外貨予算枠割当申請についてお知らせ

日本山岳会では、例年各種団体の海外登山に使用する外貨について、日本体育協会国際スポーツ行事用外貨予算枠（ワク）中より割当てを受けるべく、その申請に当つてお世話を行つております。

本35年度はこの体協割当ての、いわゆるスポーツ外貨によつて、慶応義塾大学のヒマルチュリ登山隊、同志社大学のアビ登山隊、早稲田大学のマッキンレー登山隊等、それぞれ輝かしい成果を挙げられました。

その後、海外登山に対する関心は益々高まり、すでに来年度分の割当てに対して数々のお申込みを受けております。

年末には当会内、海外登山審議委員会において一応の審議を行い、日本体育協会当局に申請をいたす予定であります。その事務処理上の都合からいつても、また登山計画の面から見ても、あまり押しつまつてからの申請は各方面に迷惑のかかることが予想されますので、一応11月15日を以て、申請受付を締切ることとしたしております。やや時機を失した感もありますが、会報誌上に発表し、更めて

て会員の皆様に周知方お願いいたす次第であります。

社団法人 日本山岳会

（二一〇号）

日本人の記録によるヒマラヤ登山年表 補遺と訂正

〔追加〕年表中1と2の間に次の二隊を追加

1 (イ) 一九〇二・九十月、新彊、ミンタカ峠越（第一次大谷探検隊・大谷光瑞（隊長）本多惠隆、井上弘円、渡辺哲信、堀賢雄）ロシアよりカシユガール・ヤルカンドに達し、カラコルム山脈の西端、ミンタカ峠を越え、ギルギツトを経てインドに達した。更に二人の弟子、渡辺、堀はコータン地区を探り、クチャの舍利容器を発見したり、ギジルの千仏洞を初めて訪ね、その壁画を将来した。

1 (ロ) 一九〇七・九十月カラコルム峠越（日野強）ヤルカンドよりカラコルム・パスを越えてレーに達した。

（訂正）

2、新彊、カラコルム・パス越えの項中、「大谷探検隊」とあるのを「第二次大谷探検隊」とし、文末にある「日本人として初の

カラコルムの峠越えを行つた」を削除

14、カラコルム（學術探検隊）の隊員中「加藤泰安」を「原田直彦」と訂正

36、ノシヤクの項中「初登頂をねらうべく行動中」とあるのを「初登頂をねらい、八月十七日酒井、岩坪により初登頂に成功」と訂正

26、石原義二を裏。二に訂正
末尾「大ヒマラヤ展目録よう転載」をより転載と訂正

（二〇九号訂正）

会報二〇九号にバトウラ・ムスタグにて昨夏遭難した五人の中にC.G. Crawford氏が含まれている旨報告しましたが、近着のアルパイン・ジャーナルの報告によれば、この五名はDr. Keith Warburton (31), A. Hirschbichler (27), R. Knight (25), H. Stephenson (23), M. Guennel (28) 及びC.G. Crawford氏が含まれておらず、クロフォード氏の死はこの遭難とは関係ないことが確認されましたので訂正致します。

（松田）

（二一〇号訂正）

誤 13頁 清水悟郎
正 16頁 ガネツシ
ユヒマルール

会報投稿規程

- ◇会報に原稿をお送り下さい
- ◇用紙は15字詰を御使用下さい
- ◇用紙御希望の方はお送りします

編集後記

二一〇号をお届けします。予定よりも大分遅れて出ることにになりました。急いでみるのですがどうも思うように行きません。編集係というのは、集ってきた原稿を机の上で切貼するだけかと思つていたら、その前に原稿を依頼して回す仕事が含まれているのでした。原稿集めにどうか協力下さい。地方ご在住の方々に特にお願いいたします。

本号は報告の記事が多くなり、加えて編集の拙いせいもあり、堅苦しいものになりました。次号では工夫をしたいと思います。

内山氏の雪の北ア横断記は終りましたが、他にも地方在住で、登山史上注目してよい方が多数おいでになると思います。後世への資料として会報に残しておきたいと思ひますので、この点もご協力をお願いいたします。

一本号編集仲間いた明るいニュースは十月七日、デオ・チバ登頂暗い話では谷川岳一ノ倉統筆事件という出来事がありました。

昭和三十五年十月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

印刷所 株式会社 技報堂

登山の遭難事故統計表

35. 9. 19 警察庁

(1表) 月別事故発生状況

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
区別	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
件数	昨年 17	3	15	14	26	13	26	21	12	14	25	4	190
	本年 13	8	14	11	33	22	54	12					169
死者	昨年 12	3	19	13	22	6	12	10	1	17	11	8	134
	本年 12	5	9	4	11	9	15	2					67
行方不明	昨年 2	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	5
	本年 0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
負傷者	昨年 5	0	6	3	12	4	21	22	11	7	15	1	107
	本年 5	0	7	5	28	15	39	9					109
事故者計	昨年 19	3	25	17	34	10	33	32	13	25	26	9	246
	本年 17	5	16	9	39	24	55	11					176

(注) 救助隊等により負傷もなく無事に救助されたもの約 50 名を上廻っている。

9月19日までに3件、死1、負1、無事救助2名である。

(3表) 原因別被害発生状況

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
区別	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
転落	件 3	1	6	5	19	15	33	7					
疲労	件 7	0	2	3	5	1	5	2					
道迷い	件 2	3	4	2	0	2	1	0					
転倒	件 0	0	0	1	3	1	6	0					
落石	件 0	0	0	0	1	1	5	1					
かつらく	件 0	0	1	0	2	0	0	1					
積雪	件 0	3	0	0	0	0	0	0					
寒気と空腹	件 2	0	0	0	0	0	0	0					
ナダレ	件 2	0	0	0	1	0	0	0					
その他	件 2	1	1	0	2	2	4	1					
計	件 18	8	14	11	33	22	54	12					

(2表) 事故者年令別

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
区別	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
19才以下	名 2	1	4		5	6	16	3					
20～25才	名 9	1	9	9	32	13	36	9					
26～30才	名 5	1	3	4	4	8	6						
30才以上	名 3	2						1					
計	名 19	5	16	13	41	27	58	13					

(注) 負傷等はなかったが、救助隊の救助活動により無事に救助された者も含む。

(4表) 山別被害発生状況

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
区別	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
北アルプス	件 3	0	4	1	9	2	14	3					
南アルプス	件 1	0	1	1	3	0	5	0					
富士山	件 0	0	0	1	0	1	8	0					
谷川岳	件 0	0	2	5	12	6	12	8					
丹沢山	件 1	0	1	1	6	5	11	1					
大山	件 0	3	1	0	0	2	0	0					
蔵王山	件 2	2	0	0	0	0	0	0					
八甲田山	件 0	0	0	1	0	1	0	0					
八幡平	件 0	1	0	0	0	0	0	0					
十勝岳	件 0	0	1	0	0	0	0	0					
その他	件 11	2	4	1	3	5	4	0					
計	件 18	8	14	11	33	22	54	12					

本表(1～4)は日本山岳協会主催、登山安全運動に関する打合せ席上において配布されたものである(22頁「山の遭難事故統計表について」参照)

この数字は警察庁へ報告のあったもののみによるので未報告の小さい事故件数は含まれていない